と、嘲けるやうに謂つて、空を向上げる。』

『何うせ田舎女でございますもの。』

『田舎女？、だね、勿論さ、田舎女なのあ知れとるが。』

『ですから澤山呵めて下さいまし。』

『誰も呵めはせんよ。』

『呵めなさらなけあ、馬鹿になさるんでさ。』

『何う致して、馬鹿にするどころか。』

と、四下を見廻して、

『おい、飯でも喰つて行かう。』

と、眼の前の松源（料理屋の名）へ入つた、飯を喰つて了つて、是から

日本橋の本宅の方へ、お今を連れ行かんと、下足番に下駄を並べさせて居る……、出會頭に、

『あら、磯川さん。お珍しいではございませんか。』

と、艶いた聲で言を掛ける者があつた、健三は聞かぬ眞似して、出去らんとするを、くるり前へ廻つて、

『同然磯川さんだ事よ。酷いんですね、御返事をなさらないでさ。』

健三は、ふと、氣が付いたやうに、狼狽して、

『これは……、八重子さんでしたか。失禮。些とも氣が付かんかつたですよ。阿母さんも御一所ですか、は、然うですか。』

八重子と謂ふは十八九ばかりの長の娉婷とした束髪の令嬢であつた。

八重子は無遠慮に、

『大層お見限でございましたのね、御旅行なさいましたつて何時お歸りになつたのですの、』

『一週間ばかり以前でしたよ。』

『あら、では餘程經ちますのね、お歸りなさいましてから。些とも存じませんでしたの、……まあ、宜いぢやございませんか。那樣に遁げなさるもんぢや無よいこと。』

と、辯舌の爽かさ。

『否！、遁げはせんのですが、連があるんですから何れ其の間に。』

『お伴侶が、おや、妹御ぢやないんですの、何方？。』

『何有鳥渡。』

と、言濁らすと、

『戀女？。』

是はまた！、あられも無い。

『戯言ぢやありません。』

『ではございませんの。』

と、お今を尻目に態けて居る。お今は健三の後に小さくなつて居た。

『お伴侶がお有んなさるんぢや、まあ仕方がございません。那樣に申上げて反つて御迷惑だと何んだから、ねえ、八重。』

と、八重子の母親とも見える四十許の上品な奥樣風の人は制し止めた

「好いちやありませんか、阿母さん。お伴侶があつたつて介はないわ」
「那麼亂暴な事をお謂ひだつて。」
「關はない事よ、阿母さん、他の方とは異ふんですもの、言はゝ……」
「何んだねえ、お前。」
と、注意されて、八重子は其と氣付いたやうに、
「爲樣がない事ねえ。妾、久しぶりだから然う言ふんだわ。折角何んだつたのに、殘念ねえ、磯川さん。彼の方御親類の方?。」
「然うです。」
「何うだか。」
と、首を傾げて、莞爾して、眼に何やら言はして、姿致をする、

「眞箇ですよ、加之、出てからまた直に入るのも何んですから。」
「然うですか、では。」
と、別れんとして、八重子は蹤々と引返して、
「磯川さん、磯川さん、鳥渡。」
と、呼止めて、びつたり健三に寄添つた、お今の胸の騷ぐ事といふものは。

（二十八）

「何時入らつしやいますの、明日、……、明後日?、で無くつて何時?、では十五日に、然う、では屹度在有つしやいましよ。お待ち申

して居ますから。』

と、健三の頬に其の唇の觸れんばかりにして喋舌り立てゝ、軈て母親の後を追つて松源へ入つて了つた。

其の後影を見送つて、

『何うだえ、大分お轉婆だらう。』

と、健三は冷笑ふやうに言つた。

『然うですねえ。』

と、お今は氣の無い返事をする。

『でも教育はあるのさ。彼でも華族女學校の卒業生なんだから豪いもりよ。』

と、何か意味があつてか、ひけらかすやうに言つた。

『立派な方なんですね。へ――。』

お今は熟と内心の不快を包んで入る。

『立派さね。まあ學問の點へ行くと、お今なんか足下へも寄りつかれない。』

『何うせね、そりや妾なんか適やしませんとも。お姫様ご田舎娘とは較物にはなりやしませんわ。當然でさね。』

『然うさ、まあ然うだな。』

『何んなら彼の方を奥様になすつたら可いぢやございませんか。』

『さ然うも行かんさ。』

『何有、妾あ國へ歸ります。はい。』
『國へ歸るッ？。』
『居ればお邪魔になるのですから、實にお氣の毒ですもの。』
『やつ、慍つてるのかい。』
『慍りも致しません。妾が不束な田舍女なのでございますから。』
『おい。降參る、降參る！。うつかり彼女を讃めた私が惡かつた。』
『何が惡いものですか。お豪いからお讃めなすつたのでございませう』
『然うでも無いよ。其の代容貌はといふと、御覽の通り二の町でね、軍配はお今の方に上がります。いや結構な事で。』
『可ございますから、澤山お愚弄なさいまし、妾の馬鹿は初めから知れて居ます。』

『有仰いますね！。大分手嚴しくなつて來た。すつかり御立腹で、はゝゝッ、實に濟まんかつたね、が、疑ぐつては可かんよ。彼女は私の何んでも無い知己なんだから、可いかねお今。』
『變な言譯をなさるぢやありませんか。可笑しいこと。』
『でもさ。もしか疑つとるのでは無いかと思つてよ。』
『誰も疑りはしませんよ。何しろ大層お口の巧いお方ですねえ。』
『詰らん處に感心するぢやないか。』
健三はふとお今の樣子に氣が付いて、
『大層滅入つて居るやうだね。何うかしたのかい。』

『然う有仰る貴方こそ鬱いか住有しやるぢやありませんか。』

『私が鬱ぐものか。』

『其は然うと、今の方は何處の方。』

と、お今は氣遣はしげに尋ねた。

『お八重……、何有今の娘かい。私も能く知らんが、先方では何か頻りとお世辭を言ふのさ。』

『でも大層馴々しい御容子ぢやありませんか。何れお近しい方なんでございませう。』

と呟くやうに言つた。其の聲は微に顫えて居た。健三は苦々しげに、

『酷く何か氣にして居るね。何んなら紹介をしても可い位なもんだ。

『それ御覽なさい、同然能く御存知の方なんでせう。』

『何んでも可いぢやないか。』

と、健三は紛らして了つて、

『おい、車夫、室町まで二臺だ。』

『應て二輛の人力車は兩人を載せて、忙がしき夕暮の町を疾風の如くに走つた、日はとつぷりと暮れて、顧背る廣小路の方には、電燈の白光が煌々と輝き渡つて居た。』

（二十九）

其の夜は磯川の本店に泊る事となつたが、一族は皆、お今を未來の家

庭の女主公とも思はぬのか、待遇の冷かさ。宛然石の上に座つて居るかの思であつた。健三は更めて父と母とに紹介はしたが、母親は例の如く苦り切り、父親は愛想の好い善人のやうではあるが、其の家事萬端は母親が宰領するものと見受られた、今日の散歩と、道でちらと見た八重子の事など思詰めて、體は綿のやうに、心も疲れて了つて、お春お花等と共に九時頃には臥床に着いて了つた、三四時間は我知らず寢汚くも眠つたかと思はるゝ頃、弗と目を覺して見ると、家族は今や臥床に就くのか一時家内は騷々しくなつてお今が寢室と襖一重を隔つた健三が居室には、女中の褥布きのぶる物言、健三が叭なご一々に聞取れたが、軈て床に着いたのでもあちうか家裡は閑然して了つた。

少時經つてから、何處からか、母親の來たものと覺しく、健三の枕頭には何やらひそ〳〵話聲が聞え出した。

お今は思はず聞耳を立てる。

『お前ね、何うかして其の邊を巧く本人に言含めて與るが可いよ、何もね、呼よせたからと言つて、そりやね、必ず女房にゝなくつちやならないと言ふ理屈も無からうぢやないか。』

『其は然うだがね。』

と、口を喙れたのは健三である、煙管を叩く音が冴えて聞えた。

『其は、まあ此方から呼寄せたのには異ないが、お前には双親のついて居る事は本人も承知だらうし、親が嫁に貰へないと言切つて了へ

ば其限の話さね、然うすりや此方から口を利いて與つて相當の亭主を有たす迄の事さ。國の噂ぢや何んでも大變に賴四郎と氣が合つてると言つてるけど、豈兄のものを弟に讓るといふ譯には行くまいからね、まあ其は別としてお前の方は兎に角斷つて與つた方が可いよねえ然うお爲なさい。』

健三は叭を生咬にして、さも懊惱さうに、

『那樣に亂暴を言つたつて爲樣がない。折角呼寄せたから來たのに那樣慘酷な事は出來んよ。人間の爲る事ぢやあないよ。』

『お前はよく〳〵お令樣に眼が無いんだね。困るぢやないか那樣田舍女を妻に据ゑて、夫の幅が利きますか、馬鹿々々しい、女は推が強

いばかりでも可けないし、縹致が可ばかりでも可けません……お前聞かない振で寢ては可厭だよ。今日八重子樣に會つたとお言ひだッたぢやないか、何方が好いか鳥渡引較べたッて解りさうな事ぢやないか。』

『勸工場の品物ぢやあるまいし、女房に素見なんてえ言ふ事が出來るものか。』

『其だから尙更大切だらうぢやないか。』

『何故？。』

『何故つて八重子さんだつてね、貰つて與れるものだと思つて九分迄は決めて有在つしやるのに、今更突放すのもお可哀想な……。』

『ではお今の方は可哀想ぢやないのか。』

『何んだつてね？。』

『でも阿母さんの論法に依ると、然うとしか鑑定出來ないね。』

『馬鹿な事をお言ひでない！、然うではないがね、八重子さんを貰つて御覽、ほらお春を熊本の兄さんの方へ上げるといふ事にすりや誠に似合の夫婦さ、其から、まあ、お聞きよ。』

と、語調を更めて、

『家の商賣だつて、自然に這麼になつたのではありません。始めは八重子さんの阿父さんが、引立てゝ宮内省の方へも種々と口を利いて下すつたものだから、一時にばつと擴つたのぢやないか。其の恩だけでも我儘は言へないわ。況して八重子さんなら何處へ押出したからつて立派な女さ、尋常なら願つても無い縁と言はなければなりません。』

『喧しい、阿母さん最うお寢みなさい、私も眠むたい。次の室にはお今が寢て居るぢやありませんか。』

『えッ？。』

と有繋に母親の面色は變つた。

（三十）

お今は其の忌はしい私語を耳にして、思はず首を夜具の衿より伸ば

して、氣遣はしげに耳を聳てゝ居た。母の去つた後は、健三の嘆息のみ少時襖を洩れて來たが、其の度お今は、針もて胸を刺されるやうに覺えた、靜に耳を傾けて居ると、健三は尙だ眠らぬのか、猶一道の徹暗き燈火は襖の隙間から洩れて、折々煙管を叩く音が、半夜の寂寞を破つて居た。

口惜さは軈て謂しらぬ悲哀を胸に齎して、果は健三の決斷の無いのが怨めしくもなる。翌朝は夙く起出でゝ、健三の眼の覺めるのを待つて居たが、容易に起出る氣色も無いので、心細さの增許り。朝飯を了つて、お春、お花の學校に行つてから。時計の刻々に刻み行く音にのみ耳を傾けて居ると、十時頃の事であつた、母のお定は車を傭つて、

『さ、お今さん、車が來ました。健三は正午頃で無くては起きさうすもいから、お前さん先へ王子へお歸りなすつた方が可いでせう。ね、然うなさい。』

『はい。』と、應ふるのみ。

お今は吩付らるゝまゝに、憂に搔曇る胸を撫さすりつゝ、健三に會はで王子へ歸る事とはなつたゝ雖然、开は明かに我を追拂つたのである！、と、お今は內心に承知した。

恁る時唯一の賴の綱は賴四郎である。我が心のうちを露に謂得るは、健三より却つて萬事に同情ある賴四郎ではあるまいか。然れど賴四郎とは、到着した其日より、何かは知らず斷え難き一條の情の糸の引か

るゝやうで、而も奇しく紊あつて居る事なれば鵜の目鷹の目の人々の眼には何んとか見える事であらう。とは謂へ、幵は唯一片の情誼に依つて結ばれた交にはあれど、口さがなき國子の爲、健三の容態にさへ快からぬ感の微めくも、我が心遣の種なれば、出來るだけ其の人の側へ寄らぬやうに力めなければ叶はぬこと！。思へば世は憂きものよ。

停車場へ出て王子の町盡頭も過ぎて、其處より野を横截つて煙突で見覺えた製造場を目標に一筋道を辿つて行くと、思はずも磑と賴四郎に出會つた。

賴四郎は嫣然して、

『今お歸り。』

と例の人の胸に泌み込むやうな笑を湛へながら、熟とお今の面を瞶つて居た。

お今はさつと面を赧くして、

『只今。』

と會釋する。

其の姿、深張りの傘を肩に翳して、今朝は修飾も忘れたのか生地のまゝの面は、宛然大理石なんどのやうに滑に皮膚のきめ細かきが、瞼を頰のあたり、ほんのりと紅くなつて、取繕はぬ鬢の後毛幾條か亂れかゝつたさまは、其よ畫中の人、賴四郎、今迄見たお今の姿の中で最も

美はしい姿致よと思つた。

「お一人ですか、兄は何うしました。大層心配さうな御様子だが何うしたのです。」

『否、何有、何んとも致したのではございませんが。』

と、手帛を取出して、汗ばんだ小鼻のあたりを拭ひながら、其のまゝ片頰に押當てゝ、

「其に昨夕は何ういふものですか、些とも寝られなかつたものですから。」

「然うでしたか。勿論此方は兎角騒々しくつて可かんですよ其で兄は何うしたのです、何かまた貴女のお身の上に就いて談でもありはしませんでしたか。」

『別に妾の前では是と謂つてお話もございませんでしたが。』

と、言淀み、急に悲しッ胸に堰來る涙を、辛うじて一片の半帛に抑へて居た。

「また母が何んとか謂つたですか。屹度然うでせう。兄も一緒ぢや無かつたですか、一緒に。は。は。其は怪しからん。まあ僕に仔細を聞かせると可いです。兄も此の頃は大分商賣の方の智恵が出て來た代り根性は甚く冷になつたやうですかな。」

何故か、お今は斯の言に又更に胸を轟かした。

（三十一）

『貴方暑かあございませんか。』

と、お今は密と賴四郎の面を瞶めた。

『では彼の樹蔭へ參りませうか。』

見遺る彼方には、五六本の胡桃の木立が、蓊鬱と葉を繁らして居たのであつた。

『でも貴女は、何處へかお出かけなさるのでございませう。』

『何有、家に居ても退屈だつたですから、ぶら〳〵と散歩に出掛けたところです。』

『左樣でございましたか。』

と、兩人は徐に歩み出した。野中に立てる一叢の胡桃の木蔭へ立寄れば、風習々と動いて、快さといひようが無い。

『眞箇に涼しうございますことね。』

と微笑むお今の面には、涙の痕の何時か拭ひ去られて、其の姿致は活々とする。

『あの、國に居た時でございましたの。』

『何んです。』

『健三樣とも斯樣風に……、ね、木立の下でお話をした事がございましたつけ。其の時は眞箇に斯樣苦勞をしやうとも思ひませんで、ま

あ那麼に面白い事でございましたらう。』

『其の時は兄の心も清かつたのですよ。』

『眞箇でございますねえ。其が何んだつて彼如も心の變つたものでございませう。』

と、謂つて、ふいと憶出したやうに、

『貴方、貴方は八重子さんといふ方を御存知で在有しやいますか。』

『八重子！。』

と、賴四郎は宛然、己が心の底に秘めた秘密でも發かれたやうに憤然とする。其の眼を圓くして、些とばかり口を啓いて。

『お知りではございませんの。』

『否！、話には聞いて居るですが……。』

と言は濁つて居た。

『好いお嬢様ですことね。』

然うですか。其をまた貴女が何うして！。何んですか、八重子の話でも出たのですか。』

『鳥渡お話も聞いたのでございますが、何んですことねえ。大層御縹致が好くつて、容子の好い方でございますのね。そして大層學問もお有んなさるんだといふんぢやありませんか。何方のお嬢様でございます。』

『知らんです。が、貴女、其の八重子といふお轉婆……、何有女を見

たですか。』

『は。』

『見たですか。』

『はい、熟く見ました。而して何んだといふんぢやありませんか。彼の方が何んだか健三様の……、ね、然うなんでせう。奥様にお成んなさるのでございませう。』

『那様事はありますまい。』

『お隠しなすつては嫌！、ね、然うなのでございませう。』

『嘘です。』

『嘘だと有仰つても、阿母様が是非貰ふのだとか言つて在有しやいましたの。』

『母がですか。』

『はい。』

『最も那様話も無かつたのぢやない、實は有つたです、母が躍起となつて主張はしとつたですが。』

と、憂慮はしさうにお今の面を見て、

『併し貴方は、其の關係を悉皆お聞きなすつたのですか。または……』

『然うでございます、聞くとはなしに遂耳に入つたのでございます……。ですから最う妾はお暇申して國へ歸らうかと存じますの。貴方が幾骨を折つて下さいましても、八重子さんのやうな方があるのに

妾が何うしやうといふは無理な事なのでございますもの、ねえ、然うぢやございませんか妾は最う、昨夕で悉皆諦めて了ひました。はい、決心致しました。』

と、手帛を咬んで嗚咽げる。

賴四郎は愁然として、

『またお泣きですか。何うか泣かずに下さい、僕は其の貴女に泣かれると……。』

と、紛らす眼は涙がきらと煌いて居た。』

（三十二）

『妾は這麼馬鹿ですから、那様御相談のある事は些も知らないで、遙々東京まで恥を晒しに參りましたの、今では恥しくつて眞箇に穴へでも入りたい心持が致します、一層お手紙を戴かなかつたら這麼恥を晒らすやうな事も無かつたのでございませうけれど、……、と申しましても、何も貴方の御存知の事ぢやございませんが。』

と、お今は心苦しさに耐へぬかのやうに、前後左右に身を動かして、胡桃の木立を其處這處と彷徊き出した。

賴四郎は、今は寧ろ一種の畏怖を有つて、

（三十三）

『お今様。』

と、渠が眞面目な時に聞かれる沈痛な聲で呼掛けた。

『貴女は何故、然う歸る歸ると有仰るのです、僕甚だ不愉快です。甚だ失禮ではあるですが、僕關はずに……忌憚なく謂へば、ですね。貴女は眞實兄を戀つて在有つしやるか何うか、其が疑はしい。』

『何んです。』

と、お今は思はず立停つて了つた。

『いやさ、貴女は國へ歸る事を其程幸福に思つて居るですか其が名譽であるですか。また潔白であるですか、但し貞操であるですか。』

『那樣難かしい事を有仰つたつて、妾解らない事よ。』

と邪氣も無く笑つて、面を赧めて居る。

賴四郎は言過したと思つたでもあらうか、

『いゝえね。貴女はですよ、阿母さんの乳が那樣に飲みたいか、疾く言へば斯うなのです。ねえ、解つたですか。』

『解りました！。』

と、所故らしく輕快に言つて、日光の洩れ來る胡桃の葉葉を向上げながら、

『貴方には種々御心配を懸けますが、考へて見ますとね、妾は歸るよりか他に仕樣が無いのですもの。』

と、聲を顫はして居た。

『よろしい！、兄が嫌なれば。』

と、頼四郎は突然大聲に叫出して、

『僕娶ひます。』

『エッ、何んですつて！。』

と、お今は今更のやうに健三が言の端々も思合はされて、胸は激しく跳り出した。

『さ、假令娶つてもですね、貴女は國へは歸さんと言ふ事です。』

『ま、勝手な事を……。』

『否、勝手では無いです、僕恐らく貴女の分別を洞察いて居る、可いですか、國へ歸ると有仰つても、貴女の氣象として決して國へ歸り

はなさらん、何うです、巧く適りましたらう僕なか〳〵人相見ですよ。』

『國へ歸らないなんて、那樣事があるものですか。』

『嘘をお吐きなさい！。』

『……嘘だと致しますと！。』

『申しませうか。』

『は。』

『汽車の軌道の上か、川の底か、其れが貴女のお國なのでせう。』

『エッ、……とんでも無い事をッ。』

『と言つても駄目です、可かんです。僕、ちやあンと知つとるです。』

と、得意になつて頬を撫て居る。

お今は默つて俛いて了つた。

賴四郎は如才無く、

『貴女、這麼處で話をして居ますと、人の疑を招く因ですから、兎も角家へ行かうぢやありませんか。』

『左樣でございますね。』

と、お今の返事の力無さといふものは、樹立を出て歩みながら、

『那樣に氣を揉んだつて爲樣が無いですよ。兄が悉皆八重子の方へ傾いて居るのなら、兎も角ですね。尙だ然うと定つたでは無いですか

ら、も少時我慢なすつて。』

『はい、然う親切に有仰つて下さるのは眞箇に貴方お一人……妾あ什麼にか悅しうございませう。』

と、口では言つて居るが腹の底で、小さい聲がして、さも意地惡さうに、

『おい、おい、お今さん、大層暢氣だね。寧死んで了つた方が可かあないか、賴四郎の云ふ事だつてあてになるものか一つ穴の狐だぜ、第一兄が嫌へば俺が貰ふと云ふのが、先方に企謀がある事で、健三と八重子を夫婦にすると、お前の身の振方に困るから、幸獨身者だし一家相話の上で爲方の無い時はお前を賴四郎の女房にしやうと

言ふのだ。健三が言つた言と能く照合して見な！。大概様子が知れさうなものだ、其處で賴四郎がお前に親切なんだ。が其も芝居とすればお座が冷めらあ？。』

はつと氣が付くと、其はお今が我ど我に語つて居る邪推であつた、賴四郎はと見ると、妙に、冷に莞爾笑つて居つた。こいつ惡魔奴。

（三十三）

家へ歸つて來ると、國子は慧き眼に兩人の姿を見て、

『おや！。お揃で何方から、相變らず大層仲が好くつて在しやいますこと。』

と謂へど、お今は耳にも懸けず、輕く會釋したまゝ急いで我が居室へと入つて了つた。

後に國子は賴四郎を捉へて、

『ちよいと賴さん何うしたの、赤羽まで行つて來ると謂つてお在有だつた癖に。』

『何有、餘り暑いから休にして了つたのさ。』

『お今さんは何んだか大變顏色を惡くして、つん〳〵して居るぢやないか、道々で嘩嘩でもお始めだつたの、餘り仲が好すぎて……。』

『相變らず皮肉を謂りてるね、一寸お今さんの心にもなつて見るさ。』

『おや〳〵大變御機嫌を損じましたね、ですが譯も知らないものが、

何うしてお今様の心になれませう。」

「姉さんはお今様の事と謂ふと、可厭味ばかり並べて居るのさね。」

と、いひつゝ慌忙しく立起つて、奥の方へ行かうとすると、國子は後を目送つて、

「また御機嫌伺か、眞箇に嫂孝行の事つたね。」

賴四郎はお今の氣色の氣遣はしさに、其の室へと來て見るとお今は身を打顫はして、髷もしどろに取亂しつゝ、疊の上に鰭伏して忍泣。

「お今様何うしましたね、何故泣くのです。泣いたつて爲様が無いぢやありませんか。さ、さ、何も那麽に……。」

と、敷居際に行んで賺し慰めるに、今は辛々身を起して、

「口惜しうございますわ。」

「其は然うでございませうが、ね、お今様短氣は起さんが可いですよ」

「もう放擲つといて下さいまし、妾は這麽我儘者なのでございますから、介つて下さらないが可うございます。」

と見上る眼は尙涙に曇つて、瞼は赤く脹れて居た。

「ですがね貴女、今日にも兄が來ませうから、來ましたら僕から、篤と精神を聞いて見る事に致します。其の返事に依つていゝさね、貴女も何んとか決心なさるがよし、及ばずながら僕もまた御相談は承けるです、母は頑固で姉は彼の皮肉屋ですから、彼の人等の謂ふ事は耳を傾ける價は無いです。」

と頼四郎は我ながら女々しと思はるゝまで、お今を宥めたお今は愈〻胸迫りて、歔欷げてのみ居たが、漸に氣を取直して、

『大變貴方に御心配をかけますね。妾は何うして斯麽苦勞性なのでございませう。』

『否、決して苦勞性といふ譯ぢやありますまいが、局外の僕さへ癪に障る位ですもの、口惜しいのも當然でございませう、僕にも丁度那樣事がありましたよ。』

『えッ、貴方に。』

『然うです。僕だつて人ですもの。お恥しい次第ではあるですが、一度は那麽熱い湯を飲ませられて、甚く窘しめられて、大した火傷をしたですよ。併し今では悉皆忘れて了つたです、は。人間は忘れるので助かりますな、忘れられんかつたら大變です。ま、死！、然う死ぬより他はありませんよ。』

（三十四）

頼四郎が尚だ學生の頃であつた。親しみ深い友人に某といふ妹があつた。友人とは極めて親しい間であつたので、何時か妹にも交際を許されて、戀草は若きが互の胸に美はしく萌出した。二年餘といふものはいよ／＼忘れ難い思を募らして居たが、頼四郎が卒業間近になつた時其の少女は双親の嚴命默し難しと謂つて、他家に嫁いて了つた。以來

頼四郎は多情多恨の人となつて了つたのである。

で頼四郎は今も、其の友人の情誼に薄く、妹なるものゝ心ざまの浮薄であつたのを、何分か怨と思つて居たのであつた。

『其の妹といふ女が、でしたね、何うも姿致の邪氣の無い點が、能く貴方に似て居つたですな。無論氣立は浮薄な都育と、貴女とは較物になつたものぢやありませんが。』

『でも妾の方は間抜でございますから五分々々でございませう。』

お今は覺えず戯言を謂つたのであつた。

何うして！。貴女が間抜どころですか。

『馬鹿な方でございますか。』

と、莞爾して、

『ではお話の様子では、先方が貴方を欺したのですから、這度は迫と立優つた奥様をお貰ひ遊ばしな。』

『其から最う一つある。是は故障は無かつたですけれど、友人に奪はれて了つたです。女の心は動き易いもので、到底信用が出來無いものと、つく〳〵と感じて了つたのは其時です。ですから一切其様事は斷念して了つて、一層ニューギニヤの方へでも行かうと思ふんです、兄は私に較べると非常に幸福者です。何故なれば六年の間心の渝らなかつた貴女があるんですもの、其を放逐つて了ふやうでは實に殘忍酷薄と謂はんければなりますまい。』

『其の後御縁談も無いのでございますか。』

『母の方から勧めたのもあつたですけれど、母は何時でも經濟向の妻君を選ぶですから、其は到底僕には向かんです、金滿家の妾の子だの、華族の畸形だの、と、謂つた風に殆ど言語同斷の者ばかり持込むです。

『何んだつて、また那麼ものをお選びなさるんでございませう。』

『知れた事です、其は次男ですから、財産を別けると謂つても大した財産が無いものですから、寧ろ本人に少しは欠點があつても持參金でも多い方といふやうな、卑劣な考からなのでございませう。』

では八重子様のお家なぞも矢張、然う謂つたやうなお家柄なので。』

『無論然うなんでも、農商務省の古い官吏なんです、慥か特許局か何かの。』

『健三様は八重子さんを何と謂つて在有しやるんです、大層深いお馴染の御様子ですが。』

『何有然ういふ譯でも無いのでございませう。去年の今頃の事でございましたらうか、一度は八重子を……と謂ふのに定つて居たのですが、八重子が餘り優しくない方ですから兄は今では最う、悉皆嫌氣が差して居るんでせう。』

斯の話の最中に、健三はお今が一人王子へ歸つたと聞いて、或は昨夕母の彈劾の言を小耳に挾んで、例時のやうに修羅を燃し、我には一言

の挨拶も無く辭し去つたのでは無いかと頻に氣遣はるゝまゝ、急ぎお今の後を追つて健三が王子へ着いたのは午後の一時頃であつた。

茶の間へ飛込んで、

『お今は。』

と聞くと、

『賴さんとお話最中なの。』

と、國子の答であつた。聞くに健三は何とは知らず不快の念の一時にむら〳〵と起つて、眼の底には凄じい光を帶び來たが、軈て太い溜息を吐いて、

『私は通麼困つた事は無い、阿母樣は理の解らない事を謂ふし、お今はお今で不貞て居るし、一層最う國へ歸して了はうか知らん、私は一生妻を有つまいッ』

（三十五）

少時すると賴四郎は、お今の室を出て二階へ上がらうとする途端。國子は目早く其と見着けて、目色もて麾くに、賴四郎は小戻して健三が側に座つた。

『何うしたえ、お今はまた何か愚痴を謂つて居たのか。』

『些とは愚痴も謂つて居やうさ。そして歸るなんて謂つてるよ、可哀さうさね、兄樣も一体何うしたんです。』

『何うも爲やせんさ。……私も最う面倒臭うなつたから歸りたいといふのなら歸して了はうか知らん。詰らない！。』

健三は心の底から思つて居るのではあるまいが。婚儀の意のまゝならぬに較憤れ氣味に自棄根性となつて居るのである。

頼四郎は惘れた面色で、

『何有、歸すんだとね、兄樣！。那麼無法な事とは無いね、一體甚麼考なんだね。今更になつて歸すの歸さんのつて那樣無法な事があるものか。……すると兄樣は、婦人一人を欺したも同じ譯ぢやないか那樣不德な……。』

と、頼四郎の口吻は意の外激しかつた。

健三はおのが言の誤といふ事を想至らぬでは無いが、何んとなく胸のうち搔亂れて、平生の着實靜穩なのには似ず、言荒かに、

『無法も何もあつたものぢやない。阿母さんは阿母さんの勝手、私は私の勝手、お今はまたお今の勝手にするがよし、其でお前が何んとか思ふなら、お前はまたお前一己の勝手で、お今を貰つても可いさ。』

と、けんもほろゝの返事。

『然うすると可いね。其とも歸すんならお盃の濟まないうち準備にからない處で歸して了ふと可いわ。』

と、國子は嘴を容れた。

『姉さんなんかは默つて居なさいッ。』

と、賴四郎は一面に姉を制へて、面は赧く、眼のうらに血潮を湛へ、殆ど逆上した氣色で兄に喰つて蒐つた。

『兄様、そ、そりや何を謂ふのだ、僕が何んか斯の結婚の邪魔でもして居るやうに！。一體僕が何んの爲にお今様を貰ふのだね。』

『何んのため？。だからお氣に召したらと謂てるぢやないか加之大層仲が好くつて話が合ふとかいふぢやないか其處は本人同士で相談づくでね。』

と、健三は嘲けるやうな調子で賴四郎を揶揄はんとした。

『怪しからん！。實に意外だね。』

と、座直して

『然うさ、其は兄様の留主の間は放擲とく譯にも行かんから多少往來もし慰めもしたのさ、其に向つて感謝こそすべき筈なのに、那麼無法な……然うさ、今も話して居つた。突伏して泣いて居つたから、賺して居たんだ、別に不思議は無いぢやないか。もし是が不思議なら、早く何んとかお今様の胸の安まるやうに、お決めなさい、僕は好んで往來するのぢやない、見るに忍ひないからなんだ。寧ろ兄様の冷淡なのを驚いて居る位のもんだ。行つて慰めて與る位は當然の事だらう。』

『私が何が冷淡なんだ。また私はお前のやうに女々しい事は嫌ひだから。』

『私は無論女々しい。然し衆が最う些と女々しくなくつては將來他人

を交へる日には到底家庭の和樂は保てないといふ事を承知なさい。姉さんも阿母さんも、も少し女々しくなつて欲しいものだし」

『生意氣を謂ふな？、私が歸すんだ、お前の容喙する限で無い。』

と、威、丈高になつて健三は呵喝した、論は用なしと、賴四郎は怒氣忿々として、足音荒く階上へ登つて行つた。

（三十六）

健三はふら〳〵と起上つて、何を思つたのか、一散にお今の室を指して行く、お今は今しも襖の外まで來て、兩人の口論を耳を聳てゝ居たが人の來る氣勢に、慌しく取つて還す後から、健三は荒かな調子で呼

掛けた。

『お前其處に居たのか、何んのために那麼ところに立つて居たんだこりや立聽をして居つたのだな怪しからん。お今、然うだらう、何有、然うで無いことがあるものか僞許り！怪しからん！。何時の間に那麼惡い智惠が附いたんだ。えお今、然うで無いものが何んの爲に斯麼處に立つてゐたんだ、さあ、泣いたつて爲樣が無い、おや〳〵、是ぢや手が附けられん。』

と、お今の前に座る。

健三は心の內で、もし斯の一場の爭論をお今が聽いたらば、我はそも什麼に冷酷無情の人と思ふであらうかと思ふと、情人の所思も慚かし

く、且は昨夕の始末も辯解して、恐氣付いた少女が心を慰めんと思はぬでも無いが、賴四郎が激しい打擊に煽られた胸は、今お麻の如くに攪亂れて、理非は既に遠く渠が形骸を逸して了つたばかりで無く、立聽したお今が姿を見ると等しく、不快の念は增々執拗に其の心頭に粘り付いた。

彼はお今を愛をしむ心の深きだけに、お今の前では飽迄體面を保たんとの自尊心高きに、母の讒訴をさへ耳にして、婚は親、姉の爲に沮まれ、己が手紙に言遣はせし事の較ともすれば反古とならんとする氣勢を悟られし上に、賴四郎には目前激しき攻擊を被りたるさへ立聽されたかと思ふと、却つてお今に辛く當つて己が鬱悶を拂ひ、且つ己が體

面を裝はむとて心にも無い冷語を放つてお今を窘しめるのであつた。

お今は其とも知らず、健三が心の氷のやうに冷いばかりか、今は科も無い我を荒々しく罵るに至つては、言語同斷とや謂はむ。人外とや謂はむ。さては健三とてもお定國子に劣らぬ意地惡者よ。と、思ふと、力も拔けて了つて、疊の上に突伏して、口惜涙に咽入るばかりであつた。

較ありて健三は、お今の耳先に口を寄せて、

「だがね、お今、能く私の謂ふ事を聽いて呉れ、え、聞分けて與れんか。」

「否、聽かなくつても解つて居ます。」

『何有解つて居る？……、何かい、賴四郎の謂ふ事で無くつては解らんのかい。怪しからん事つたね。私が歸つて了へば可いに！謂つたが、其が何うした？。』

『ですから、妾は……妾は歸ります、はい、歸りますから。』

『歸る？……ね。よろしい！、お歸んなさい、一向差支はありません

お前の自由ですから、私は敢て止めはせんよ。併しお前は、私を誤解して居るね。確に！。』

『何が誤解でございませう。貴方こそ何んでも秘して在有しやる癖に！。』

斯は明に健三の胸の急所を射たのであつた。

『え、え、何んだとね。私はお前に何を秘して居るだらう。お前は何んでも聞咬つては其で種々と邪推するから可かん何故儼乎と優しくして居られないのだ。優しくさへして居れば、私が何んだつて約束を反古にするものか。お今！、お前はね、何んでも自分から事を破るんだ。』

『何故でございます。』

『何故といふ奴があるものか、現在種々な事を弟に謂つてるぢやないか。癖んだ性根で何んでも聽咬つちや弟の處へ持つて行く。那樣奴があるものか。其では將來到底家を治めて行くのは難しからう。お母さんの心配するのも無理は無いさ。』

『何も妾は喋舌りは致しません。』

『何有、喋舌らん事があるものか。現在今も喋舌つて居たぢやないか斯の間も喋舌つて居たぢやないか。優しい女だと思つて居たら大變な浮氣者だ。呆れたもんだ……。私も少々驚いて居るんだよ。』

（三十七）

國子は寡ろ好奇の心に驅られて、室の外まで來て容子を窺つて居た。餘り健三の見脉の劇しきに、衝と室に入つて、

『何うしたの健さん、お可哀さうに那麼に酷い事を謂ふものぢやないわ。謂ふ事があるなら、最つと優しく謂つたつて解るぢやないか。

お今樣も優しくしてお在有なされば可いに、何か口返答をなすつたの、可けませんね。何も又斯樣事を神妙に聞いてる事は無いぢやありませんか。彼方へお出なさい。お可厭？　何故？。まあ剛情なのね、何を那麼に腹を立てゝ在有つしやるの何も那麼に口惜しい事も無いぢやありませんか。』

『否、可うございますから、放擲つといて下さいまし。』

と、お今は常に無く斷乎と謂放つた。

『ぢや、お介ひ申さなくつても可いんですね、然うですか、まあ。』

と、嘲けるやうに微笑した。

『姉さん、何を謂つてるんだ、可いよ。私は尙だお今に謂つて聞かせ

る事があるのだから。」

國子は健三に、ちらと白い眼を見せて、さつ〳〵と室を出て行つて了つた。お今はやう〳〵涙一杯の面を振あげて、何事か、謂出さんとはすれど、小さい胸には種々の思の亂れて、又も鰭伏して、よ、よと泣く。健三は較勢を失つた樣子で、

『お今、何か謂ふ事があるのか、え、聞かうぢやないか、一體何ういふ考で來たのだ。』

と、これはまた意外な問。お今は焦燥して、

『何うせ妾は……妾は歸りますから。』

『いよ〳〵歸るね、屹度！。』

『はい。』

『歸るね。』

お今は啜上げて、

『歸れなら歸ります。何も那麼に難癖をおつけなさらなくつても。』

と、較少時考へて居て、

『妾はもう歸りませう。貴方はまた何故……、有仰る事があるなら、靜に恁々だと有仰つては下さいません、何が那樣にお氣に障つて？……、妾には些とも解らないんですもの。ですけど今となつて何んと申上げたとて。』

と、突俯して了つた。

『だがねお今。』

と、健三は所故冷笑つて、お今の横面を覗き込みながら、

『恁なんだ、まづ私の謂ふ事も聞いて欲しいんだ、え。お今お前不貞てるね。よろしい。不貞て居る者に駄辯も無駄かい。歸るが可いさ

お歸んなさい。詰らん！……どれ。』

と大仰な掛聲で起上つたが、お今は尙も身動もせずに居た。健三は張合が拔けて、良刻躊躇つて居て、また引還して、

『だがねお今。』

と言を優しくして、密と背を搖つて見ながら。

『尙だ泣いて居るのか、大概にせんか、おい。全體何ういふ考なのだ

？、國へ歸らうといふのは。』

と、抱起さうとする……。お今はわれにも非らず五體を剛張らして、緊手と疊に獅嚙付いて居た。其の剛情！。

『何んだ？、女の癖に。歸りたくば歸りなさい。馬鹿々々しい。』

と、健三は業を煮やして、ぷいと室を出て行つて了つた。茶の間へ來ると、

『お今様は何うする心算なの、健さん。』

『いや、呆れて了つた。彼女の剛情には。』

と、冷に笑つた。が、心の底には今一度言を穩にして、昨夕の始末なご辯解せんとの思が滿々として居るのであつた。とは知らずに、

『賴様と取換て了ふと可いね？。』

と、國子は口を滑らした。健三は急かに眉の間に不快な色を呈はして

『全體姉様等が非い！、何んとか庇護つて與つてくれゝば可いのに、歸すの歸さないの、取換へるの取換ぬのつて、人間らしくも無い事ばかり調ッてるのだもの。』

『あら！、妾にまで飛沫？、嫌な健さんだ……迷惑ね。』

『國子は面白さうに笑出した。』

（三十八）

圖らず國子とも一場の言爭を惹起して、健三は三橋が家を立出て、

上野へ着いたのは日の暮近き頃であッた。其處より歩みて家に歸るともなしに彷徨ふうち、何時か下谷練塀町なる八重子が家近く來て居たのに、我にも非らず胸を轟かして、もし偶然に八重子に出會ひでもしては面白からずと、漫怖を抱きて歩を運べば、何の琴の音の漏れ來るは、疾や八重子の家近くなッて居たのである。

國代と記された軒洋燈の灯された新築の一棟は正しく其の人の家なるに、何んとなく立來りたい心地もして、蹤々と門まで進み入る……、

と、お今の突伏して泣き居る姿の歴々と眼の前に浮ぶに、頸元よりぶる〳〵と寒氣を起して、思はずも倉皇二三歩後に退かんとする時、

『磯川さん……。』

と、頓狂な聲で呼掛けた者がある。脅然として顧背ると、

『誰方かと思つて居たんでございますの、さあ何うかまあ、お入んなすつて下さいまし。』

と、先に進まれて、健三は不承〳〵に内に入つた。琴の音は磕と休んだ。

折しも父も母も在らで八重子は一人座敷の椽近く座を占めて獨、琴を奏つて居るのであつた。下女の報に出迎へて、

「什麼風が吹廻つたんでございます、……能く入來しやつて下さいました。」

八重子は今は某の師團にある中尉の兄を除くの外、姉と妹とを有つて

居たが、何れも夭死して了つて、國代の娘としては八重子ばかりの所謂一粒種。されば兩親の寵愛一身に集つて、敎育はをさ〳〵兄に劣るまじく躾られた。物心づく頃から多病の性質であつたので、自然放縱に育てられて、其の請の全て聽されぬと謂ふ事が無かつた。婚姻さへ其の心に任して、人物位置財産など相當しくば、誰にても好む方へ嫁ぐべしと實に歐化風の育方であつた。健三とは父と父との關係よりし相知る間であつたが、演劇花見、日常の往來など自由に交際を宥されて馴〳〵しさに失する傾があつたが、敢て咎も蒙らなかつた。健三はさして八重子を好むといふでは無いが、世に希らしく自由の交際を宥さるゝと、其の性質の生意氣に傾いて居るに、朝夕の往來には却つて興あ

る心地して、一時は深くも心を惑はされて居たのであッた。今でさへお今さへ居らすば、愛は全く八重子に集まるのであるが、然ればと謂ッて不思議は、百年の苦勞を共にしやうとも思はなかッた。が、健三の心を深く知らぬ八重子は、日を追うて健三に狎れむとするは、明に樂しき未來を夢みて居るのであッた。

健三は何んと無く心の底を探られるやうな心地して、例時のやうに打解けぬに、八重子は其とも心着かぬか、

『大層お顔の色が可いぢやありませんか。そして何んですねえ。妙に鬱いで在有しやいますのね。今日は何方へ？。』

『王子から參りました。』

『王子？、嘘！。王子に藝者が居ますの……數寄屋町の間違ではございませんの。』

『とんでも無い事です。』

『時に先日は失禮致しました。お連のお有んなさるのに些も氣が着かなかッたものですから後で極が惡くございましたわ、彼は誰方？、戀人……、では無くつて。秘密？。大層綺麗な方だつて阿母さんと然う謂つて居ましたの。御親戚の方？。』

『はア。』

と、狼狽した返事をすると、

『何うですか。』

と、冷な眼で健三を瞶つた。

（三十九）

八重子は較沮げた狀で、

『今日は阿父さんは宴會だつてお留守ですし、阿母様は今方鳥渡使に出たのでございますから、直に歸りませうですから御寛りなさいし。お夕飯は？、お濟みになつたんですの、ではお茶でも一つ召食つて下さいましな。』

と、愛想して、急に憶出したやうに、

『貴方、ちよいと健三さん。淡島といふ方御存じ、矢張一昨々年の卒

業生で、背の高い、金縁の眼鏡をかけた氣障な人貴方を知つてるつて然う謂つて居ましたよ。』

『能く知りませんな。併し會つたら……。』

『然う！、では最うお忘れなすたんでせう。』

『其が何うしたんですか。』

『え、可笑しいの。阿父様の下役になつたんださうですが、ちよく〳〵家へ遣つて來ますの。彼でも大層悧巧なんですつてね。可笑しいぢやありませんか。』

と、意味ありげに微笑つて見せる。

『悧巧だから悧巧なんでせう。何も可笑しい事は爲いぢやありません

か。』

『其が……。』

と、言差して、さつと面を紅くして、

『妾が欲いんでございますと。』

と、健三の面を見る――横の方から――。

『結構ですね。』

『あら！、餘り結構でも無い事よ。何んですつて、何んでも。』

『妾が取次をした事がありましたので見覺えて了つたんですつてね。そして妾が知りもしないのに、先方では能く途中でお見掛け申しましたが、此方の令嬢だとは夢にも知らなかつた――、と申しますの。

眞箇に可厭な奴つたら……免職にでもして了ふと可いんですけれど役に立つといふのなら、まあ爲樣がありませんね。』

『其から何うしました。』

と、健三は面倒な奴、といふ面で返事をした。

『何しろ父が氣に入つて居ますから、或は……。』

『或は……、が何うしました。』

『嫌な磯川さん、大概解つて居やうぢやありませんか。』

『然うですか。では大概お決めなすつたんで　結構な御緣ぢやありませんか。』

八重子は不平らしい面をして、

『まあ、結構だか何んだか知りませんけれど、妾は那麼方は嫌ひですわ。ですから最う辭つて了ひました。』

『ですが、八重子さん、恁う申しては失禮ですが、自由結婚なんてえものは一利一害で……日本の社會では尙だ早過ぎるかしら、矢張親の見立に小言を謂はないのが、結局悧巧といふものですな。私なども悉皆其の方針に變へて了つたですよ。』

『ですけれど磯川さん。親も許し本人も好んでゐるのなら、尙更結構でせう。阿父さんの氣にばかり入つて居ましても甚麼人だか氣心も解らない人と夫婦になるなんぞは。餘り智惠のあつた話ぢやあるまい。矢張一年なり二年なりお昵近になつて居ましてね、氣心を知り

合つた上で夫婦になりますのが歐化主義に適つて居るぢやありませんか。文明的ではありませんお。好きもしない方と壓制で以て爲方なしに夫婦になつてでございますよ、何時も家庭が紛紜して居て御覽なさい。世の中に是程詰らない事はありますまい。』

と、女丈夫といふ意氣込で辨じつける。

健三は、けろりとして聞かざるもの丶如き氣振であつた。

八重子は急燥つて、

『貴方は大層冷淡で在有しやいますのね。』

『何故ですか。』

『何故でございますかね。妾は知りませんわ。時に磯川さん先日のお

連は奥様ではございませんかつてね、母が申して歸りますんですよ
然うぢやなくつて、妾なんぞは一向氣も付きませんでしたけれども
母がでございますと。母が然うぢやないかつて申して歸りましたの
然うなんですか、眞箇に。」

（四　十）

八重子が詰るが如き話の間に、母親は湯より歸つて來て、白けた座は
又一時賑はしくなつた。半時ばかりも經つてから、健三は母娘が話の
合槌にも飽きたのか、疾や歸らむといふを母親は引留めて、
『ま、可いではございませんか、八重子やお前また何か氣に障つた事

でも謂つたのぢやないかね。眞箇に遠慮なしに何でもお辯りだから
困つて了ふ。』
と、娘を叱るやら、健三を操すやら。
健三は極惡げに起ちも爲兼て居ると、八重子は憤れつたさうに、
『だつて仕方がないわ。妾にはお客様のお對手が出來ないのだもの。』
健三は再び座に就いて固くなつて居ると、母子の間には何か囁事の
せられて、
『健三様、變な事を伺ふやうですが、伺ふ事は伺ひませんと何んでご
ざいますから。他でもございませんが。』
と、母親は妙に眞面目になつて、

『先達の若いお方は若しや奥様ではございませんか。あの阿母様からは那麽お話も承はりませんでございますから、正可とは思つて居りますが、伺つて見ないうちは、又甚麽御都合になつて居りますか。』

『彼ですか。』

と、健三は當惑して、

『彼は其の何んでございます。田舍の親戚の娘なのでございますと。』

ま辛うじて謂拔げた。

『然うでございますか、其ならば可うございますがね、もし奥様であつたり致しますと、お母様とお約束申した事もございますから、其

に八重も最う年頃でございますで、ちよく〳〵申込もございますやうな、ね、譯なのでございますから。』

『母と今かお約束でございますので。』

『貴方さへお差支がございませんと、何うか八重をといふ事にお約束致しましたので。其に八重も知らぬ方よりは磯川様なら行つて見たいと申して居りますから、けれど貴方にも又甚麽お考があるか知れませんわ、ねえ。唯能く例も來て下すつて、愛想好くして下さるのは貴方ばかりですからもし那麽お考でもお有んなさるかと、夫禮ではございますが、思つて居つたのでございます、何れ阿母様からもお聞きなさいましたでせうけど。』

『否、母からは一向那麼事は承はりません、然し思召は實に有難うございます。が御存知の通り、未だ事業も辛々損益相償ふ位のものでございますし、家内は大勢であるですし妹は二人も居りますし、弟も相變らずぶら〳〵致して居りますし、其に年寄で我張つて居りますから、なかなか八重子様をお貰ひ申すと謂ひましても、双方の不利益かと思ふんですよ。到底八重子様が來て下すつても、却つて何んでございますから、是は私の方から御辭退致します。』

『八重子は何時か座を外して居た。』

『其は我儘に育つて居りますから、然うお考へなさるもの御道理でございますが、其の邊は能く私共から謂聞せませうし、八重も望んで居るのでございますから、其處等には御掛念は要りますまい。』

『猶母からも申上げさせますが、私はまあ御辭退申しますから、惡しからず……。』

『那麼に鹿爪らしく有仰つては、物が申し憎うございますがでは矢張八重子ではお氣に召しませんので、呑込が惡うございますから、然うなら然うと有仰つて下さいまし。實は那麼に可愛がつて下さるんですから、何うか夫婦に出來るものならばと早合點をして了つたものですから、大層失禮な事を申しました。』

と、嫌味たら〳〵。娘を娶つて欲しさの手詰の嚴談とは知られた。諾ふできか、否むべきか、健三はそも何んと返事をして可いのであらう

（四十一）

「否、とんでも無いッ？。然うお取んなすつては實に迷惑でございます。悅んで、否寧ろ進んで望む緣なのではございますが、今申す通りの譯なのでございますから。」

と、謂ふ苦しさ。膏汗はじり〳〵と背に泌み出て居た。

「貴方もなか〳〵お口が巧くつて在有しやるんですね。」

「那麽譯でもございませんが。」

「では、矢張何んなのでございますか、八重ではお可厭なので。」

「否、私には那麽勝手がましい考があるのぢやございませんが、分に過ぎて居りますから。」

でも分に過ぎる位の事は我慢をなすつて下すつたつて謂いぢやありませんか。折角八重も那麽に申して居りますのを今更何んとするのも不便でございますから。」

「困るですな……。」

「お困んなさるんぢや失禮でございますが、同然先日のお娘御は奥樣なのでございませう。其ならば其と有仰つて下さいまし。然う致しますと八重の方は私が叱りましても。」

此に至つて健三は默然として居た。

母は詮方無く、

『では何れ阿母様の方から御返事を承りませう。詰らん事を申しまして嘸お懊惱くつて在有しやいよしたらう。八重やお茶を煎れかへて上げな。』

と、娘を呼立てる。

八重子は有繋に面眩げに立出たが、怨を帶びた眼に健三を一目見て、逡巡しながら母の傍に座を占めた。健三は快げに雜話を始めたが、何時か三人の間に笑聲が起つた。健三は軈て歸らんとして立起れば、兩人は送り出て、

『眞箇に今夜は失禮を申し上げました。』

『阿母さん、まだ早いやうでございますから、あれを、ね、買つたりしたうございますから、御一緒に參りませう。磯川さん其處まで御迷惑でもお供致しませう。お厭り。』

『何う致しまして、さあ〳〵參りませう。』

と、健三は態と氣輕に言つた。

母は口を喙れて、

『お前明日でも云いぢやないかね。健三様が御迷惑でございませうに然う、では仕方がありません、女中をつれてお出なさい。』

かくて健三は八重子と女中とを從へて、國代の門を出た。八重子は、ひたと健三に寄添つて、宵ながら寂しい町を歩み行く。

『お母様は貴方に何ぞお話があつたでございませう。』

と、八重子は氣遣はしげに尋ねた。

『お聞きでもございましたらうが、貴女を娶つて與れろといふお話なので。』

と、健三は垂頭きながら、氣の無い返事であつた。

『否、些も聞きませんでしたよ。ですが貴方は何ういふお考なんですの。貴方にお差支が無ければ私は眞箇に甚麼に嬉しいか知れやしません、多分お厭なのでございませう。』

と、低聲で獨語やうに謂つた。元來物に臆せぬ性質ではあるが、八重子が此の時の如く鐵面皮しい場合も多く無かつたのであつた。で、健三は内心に呆れて、依然として垂頭いて、頑として口を噤んで居た。

八重子は又憶出したやうに、

『丁度二月許お目に懸りませんでしたね。』

『忙しかつたものですから、遂御無沙汰を致しました。加之貴女も大切なお體ですから、今迄の樣に自由な御交際も出來ない譯なのでございます。』

其の聲が、ふと耳に入つたのか、擦違さまに兩人の姿を眺める女があつた。八重子も顧背いて見反すと、女は靜に小暗い方へ身を寄せながら、

『健三樣だ！。彼の聲は、健三樣に異ない。お伴は八重子樣とかいふ何時か見懸けた人……、では矢張妾は欺されて居たのだ。』

其はお今であつた。お今は何故に斯の邊を徘徊いて居るのであらう。健三は夢にも其と知らぬ様子であつた。

（四十二）

お今は青天の霹靂にも似た健三の仕打に、一切の望を打碎かれて、一度は死なんと思ひ一度は故里へ歸らんとも思つたし渠女は一旦恁と思決めた事の、圖らずも齟齬して、身は限なき恥辱に汚されて了つたのである。

お今は健三が室を出去つた後は、奈何に斯の身を處すべきかを案じ煩うて、今はなか〳〵に人をも世をも頼む事の愚である事を語つた。日

がばつたり暮れはてた頃の事であつた。亂れたる髪を撫着け、荷物のうちに要あるものを一つ包に纏めながら、燈火を挑げて、晝のうち取寄せて置いた硯と紙とを取出して、二通の手紙を認め了つて、床の上に置いた。頼四郎に見つけられては、引止められる事もあらんかと、椽から庭に下立ち、ぐるりと庭を一廻して、例の切戸を押開け、暗に紛れて門まで出て了つた。

吻と一息して、門前に臨んだ頼四郎が階上の室を仰げば、一枚を餘した雨戸の隙から、燈の影窓外を照らして、餘光塀際の葉櫻の梢に辷つた。室の主人は未だ寢ねぬのでもあらう、一時咳拂の聲が聞かれて後は、洋書の頁を飜へすやうな音の大氣の濡りたればか、微に聞えた

耳門の鎖を引いては、奈何に其の人を驚かすであらうかと、少時躊躇つて居た、軈て大なる嘆息の洩れ來るに吃驚して、お今は悸と身を竦めた。注意に注意して耳門を押すと、するゝと靜に啓いて、氣遣つた程音も無かつたので、無いで門を出て了ふと、俄に心細さの增して來るが、また何んとなく胸が晴々しくなつたやうにも覺えた。

兎もあれ！、と云ふので停車場へ急いで、汽車に乘つて東京へ着いて、煩惱く限纏ふ車夫等が呼聲を耳にも懸けず、廣小路を横截つて、何處といふ的も無くぶらゝと歩を進めた。而して兎ある横町を曲つて、五六間も行つたかと思ふと、はしなくも健三が八重子と押駢んで行くのに邂逅したのであつた。

お今は、むらゝとして燃上がる瞋恚の炎、一度は後を追つて、兩人並べて置いて健三が薄情を詰り、思ふ存分赤耻搔して與れやうか？、とも思つたが、否、待て！、自分は既に健三を思切つて王子の家を逃出した身であつて見れば、其も要なきこと、一片の手紙に欺されて遙々上京した自分こそ世に假令の無い魯者ではあるまいか。と、思復して、薄暗い横町を、とぼゝと辿り出した。

『えッ、口惜しいッ。八重子さんといふ立派な方がありながら、何んだつて妾を呼寄せたのだらう。人を欺かるにも程があるね、然うさ妾は健三様に欺されて東京まで赤恥晒しに來たんだ、其に異ない、今となつては阿母様に面目ない、妾あまあ、什麼氣で彼如も剛情を

張つたのかしら。と謂つても今更爲方がないか。」

『ところで妾は何處へ行く氣なんだらう。何んする目算？、西も東も更に知らぬ土地を這麼事して歩いて居て、其の間に夜が更けると、泊る家もなし……、あ、あッ、寧死なうか。」

決心したといふ譯では無かつたが、斯はお今の胸に幻の如くに映つた考であつた。

『國へ歸ると謂つても面目ないし、妾あ、妾あ、まあ何うすれば可いのだらう。』

其の手は何時か懷中へ差入れられて、其の面は深く襟に埋もれて居た何處を何う歩いたか、宛然夢心地で居ると、突然、

『やつ、嬢様何うなすつた？。』

と、錆のある太い聲で呼止めたものゝ無い筈にと。咄嗟さて不思議、斯の帝都廣しと雖も我を知つたものゝ無い筈にと。咄嗟の間、お今は内心に異様の感を起しながら、面を擡げて、と其の人の姿を見て。

『ヤッ、貴方は……。』

と、吃驚すると、

『櫻山ですよ。』

夜目にも其と、戸毎の軒洋燈に明に見られた。渠は櫻山であつた。

（四十三）

「まあ、何うなすつたんでがす。今ッから何方へ在有つしやるんで。ね、室町の方へでがすか。では見當が違がひますぜ。」

「いゝね、然はうでございませんので。」

「では何方へ？。」

「何方へと申しまして、別に的も無いのでございます。」

「じやうだんぢやがあせんぜ。的も無しに今時分歩いてる奴もねえもんぢやがあせんか、何んでがすか、迷子におなんなすつたんで。」

「其様譯でも無いのでございます。」

と、お今は何んとなく茫然して、言葉には至つて力が無かつた。

櫻山は例の如く、頬の邊には冷な笑を漂べて居た。

「其様譯でも無えんですがと！、はあてね、全体何うなすつたんでがすえ、お國へお歸りなさらうてえんですか。」

「いゝえ、……あの、然うでもございませんので。」

「解らねえな。」

「はい、自分にも解つて居りませんので、尙だ何んと身の振方を付けて可いのか。」

「王子の方は何うなすつたので。」

「逃げて參りました。」

と、應へる目算でも無く應へて了つた。

『逃げて……、ね。』

『はい。』

『ぢや今夜は何處にお泊んなさる！。』

『何處と申しまして。』

『宿でも取つてありますかい。』

『いゝえ。』

『妙でがすな。貴女些いと何うかなすつちや在有しやらないか。』

『何有……、え、其の。』

と、狼狽して、はつと我に返つて、

『少し考事がございますものですから。』

『或程！、何うも些いとばかり變挺だと思ひましたよ。ところで斯う起つて居たつて爲様がねえ。雨も降つて來さうだし、夜も更ける、何うでがす？。私の許へお在有なすつちや？。え、而して落着いて緩りとお考なすつた方が可うがすよ。また及ぶだけ何んとか御相談に乘らうぢやありませんか。遠慮はしなさらねえが可い、つまらねえ事つた。お見受申したところ、何か大しか心配がお有んなさるやうだが、捨てる神あれば助ける神ありつてね、世の中は然う心配する程の事もねえもんでさ。さ、そろ〳〵出掛けませうか。』

『はい。御親切は有難うございますが。』

『何んだ、尙だ遠慮かね。いや一酷な方ちやあるめえか。御覽の通り私あさくばらんの能なし野郎だが、人樣の難儀を見ると、何うにも放擲とく氣にはなれねえ。まあ、性質なんでがすね。家へ歸えたつて年寄が居るんぢやなし、斯う見えたつて尙だ獨身者なんでね。ですから氣の置ける奴なんざ、一匹だつて居ませんのさ。結局氣樂なもんでね、へッ、へッ、へッ。次第に依つちや、假令一月や二月逗留なすつたとこで、格別面倒もありやしません。何有、つい近所でがすよ、斯の先の横町を曲ると直でがす。』

と、引立てんばかりにして誘はるゝに、お今は强つて辭みも爲兼ねて逡巡して居る。と、ひやり頰を掠めて、やがては、ばら〳〵と降り出す雨。向上げると、空は何時の間にか一面に搔曇つて居た。折りも折とて、降り出す雨に、お今は殆ど進退窮まつた心地がしられて、

『えッ。』

と、舌打した。

『まゝよ。』

とばかり腹を据ゑて、半分は自棄になつて、明日が日奈何なる難儀が懸らうと、また其の時は其時の思案、目前の危急はそれよ！、先方の親切氣な言を渡りに舟と少時の雨宿、旅の恥は搔捨てよ！。と決心して、

『では御親切に甘えまして。』

『むゝ、其が可がす。』

と、櫻山は莞爾して、

『大降りにならねえうちに、急きませう。』

（四十四）

健三と一場の言爭をして、賴四郎は棲上の己が室に引籠つて限なき憤怒に身を焦して居るうち、お今が室にも又々一騷動の崛起つたのに覺えず胸を轟かしたものゝ、今日より再びお今を見ざるべしと決心して、獨業を養やして居た矢先であつたので、そ知らぬ面して、深く事情を探らうともしなかつた。が、蟲が知らせたのか、夜は九時頃の事

でもあつたらうか、心狹き女の思に惱んでは、奈何なる凶事の湧き出んも圖られずと、密かに二階を下りて、お今が室の容子を窺ふと、室内は寂として、燈火の影さへ漏れぬに、疾や寢に就いたのでもあらうか。と、引返さうとすると、襖の隙から椽先に眞白きもの微見ゆるは將に落ちんとする月影の雲間より辷るのであつた。

賴四郎は忽ち胸を突かれて、襖を啓けて裡に入ると、室は奇麗に取片付けられて塵さへ留めなかつた。さて遲かりしか？斯迄氣早い女とも思はなかつたが、晝の間の兄の激しい言に取詰めて、さてこそ家出したに極まつたり。と四下を眺しながら、床の上に置かれた二通の手紙を取上げて、自分に宛られた一通をば急ぎ讀下すと、

『……一度は故里に歸らんかとも申し候へども、今さらおめ〳〵と、歸る事もなり侍らず、おほせに從ひ其は思とゞまり申候。然りながら幾久しく御世話に相成り居り候へば、貴方様の御迷惑も、さこそと察し上げまゐらせ實に〳〵心苦しき事に候へば今はなか〳〵に斷念め強く相成り申し、何事も妾が不運とあきらめ、殘り惜しきお暇申上ら〳〵。何處へ參りて宜しく候やらむ東西知らぬ賴無き身に候へば、何處へとも定め難なく、二度お目に懸る事も候まじと存じられ候。永々の御親切は胸に染み居り候まゝ幾千代かけて忘れまじく候、賴み難き事を賴みといたし、はる〳〵と上京仕り、はしたなき身を御覽に入れ候

が今更恥かしく候へ共是とても草深き田舍に育ちたればの事に候へば、お笑下されまじく候……。』

斯して居た事ではあつたが、賴四郎は今更のやうに仰天して、

『や、や、やつ。』

と、二通の手紙を引握んだまゝ、玄關へ駈け出て、下駄履く間も遲しとばかり、突と外面へ飛出して一散走り……。

× × × × × × × × × ×

健三は八重子に絡はられて、お今と擦違つたのさへ知らすに暫しは其の邪氣の無い情に、お今のある事さへ忘れはてゝ、心は二道に迷つて

われながら其の決斷に乏しいのを驚いた位であつた。口惡き國子の言に據つて、弟とお今との間に、何等か捉へ難き秘密の蔽包まれたるを信じて、計らず口角泡を飛ばして弟を詰れば、牙は全く己が邪推には過ぎて、二人の心には塵ばかりの汚點も留めなかつた。愈慚かしき思はしたれど、勢の走る處我を驅つて、憐れなるお今をさへ罵り、はては八重子をさへ訪れて、心は眞に其に傾きしといふでも無いに、暗中陰影を並べて、其の嬌語に耳を假せし不覺の淺猿さ。

かくて八重子に別れて家に歸つた時は、頭腦は冷却して、飄然として我に返つた健三は、悔語の惡鬼に呵まれて、明日にもならば王子に行つて、思に惱むお今を慰め、わが眞心を打明けんといふに考を定めて

枕について、とろりと睡むかとすれば、

『兄様、大變だ大變だ。』

と、喚きながら、賴四郎は寢込に踏込んで來た。而して枕頭へ彼の手紙を投出して、慨然として、どつかと坐つた。

『何んだえ？、喧しい。』

と、晝の仕打の今更慚かしく、所故寢返り打つて冷然として居た。

『手紙……、何さ、お今様の置手紙です。』

『何んだ！……、と ッ。今の置手紙？。』

と、勃然と起上つて面色を變へる。

『兄様、お今様は家出をしました！。』

『えッ！。』

（四十五）

健三は抛り出された手紙を取るより疾く、封押切つて讀下すと、

『……ながゝ御心配を相掛け申譯も無之候、然るお心と存じ候はゞ、何事も此の身の不束なればと斷念めて、わざゝ參り候て御内に波風もおこさせ申すやうなる事もなし侍らざりしに、唯お手紙をのみ頼みにいたし候は妾が心の不覺とこそ存じ侍れ慚しさいや勝り申しらるゝ、されど一度誓ひたる心の誠は、今更破り申さんも女の道として心苦しく候まゝ、是より何方へなりともまゐり一生夫にはかしづき申すまじと思案を極めらるゝ

たゞゝ行末ともお今と申す憐なる女のありしとさへ折節に憶出し玉はゞ此の上もなく悦しき事に御座候、再びお目もじ申上ぐべき事の覺束なく存ぜられ候まゝ、筆の運も心のまゝならず候へば委しき事も申上げ侍らず、口惜しき事には候へ共お察し下さるべく候。

と、いふに筆を止めてあつた。

讀み行くうち、健三の面色は漸次に變つて、

『何んだ。こりや。全体出て行くのを誰も知らんといふ法が無い。是では行先が全く不明瞭ぢやないか。』

『然うです不明瞭です。全く姿を隠して了つたんですから、今更其座事を繰返す必要はないですね、また繰返したからと謂つて後の祭だ。僕、豫め這麼場合が來るだらうと察しとつたですよ。』

と、賴四郎は兄を呵責むやうにして謂つた。

『察して居たばかりでは、今となつて鐚一文の價値もないぢやないか』

『勿論です。するから僕が何んとかして慰めて居やうと思ふと、……いやお蔭で汚らはしい疑を受けたですよ。而して其の結果がお今様の出奔です。』

『何うも困つたな！、何んとか探し出す工夫が、……無いかな。』

『恐らく有りますまい。』

『困つたな！、斯麼騒動が起らうとは思はなかつたよ。實際。』

『爲方が無いです！。畢竟兄様がお今様に對する處置が酷に過ぎたから、斯う非常な事になつて了つたのです　今更何んとも取返しがつかんね。兄様は勿論此の罪を荷はんければならんです。出奔したお今様には決して罪がない。寧當然の出來事です。僕をして、……ですね、お今様たらしむれば、可いですか。同然斯の手段を取つて自分を潔くします。』

と、渠は議論的口吻を以て喋々と辨じる。

『廢せよ、今は理屈を謂つてる場合ではないぢやないか。』

『ですが、僕は飽までも兄様を責める！、貴下は非い。第一親御に對

しても。』

『解つて居るッ！、不要ん事は謂ふな。』

と、健三は苦痛に耐へ難き様子で、

『併し死ぬやうな事もあるまい。何しろ是非手を盡して探さんければならぬが、全体姉が氣が利かん。』

『氣が利くどころか、姉様は寧ろ今日ある事を望んで居つたのでせう。』

『併しお前だつても氣が利かんぢやないか。』

『僕ですか。僕はもうお今様とは面を合さん事に決心して居つたのですから、仕方が無いですよ。兄様は自分の非を棚に上げるから怪しからん。』

斯の一場の騒動に、父も母も健三の室に集つて、殊に驚いたのはお定であつた。平生餘り多く口を利かぬ父は、お今が二通の手紙を見て、靜に語出づるやうは、

『まあ〳〵、那様に騒ぎなさんな、慌てゝも爲様が無いぢやないか。折角一人で上つて來たものを、餘り此方でごたごたして居たものだから、取越苦勞をして家出をしたと謂つたやうな譯なのだらう。此の手紙の様子で見ると、何か決心をして居る様子だが、いや感心な量見では無いか、是位量見の定つた女を、惡く謂つた國も惡いが、家内も惡い、健三お前何うにか探し出して、今度の婚禮を取急ぐが可いよ、其とも何處ぞ点の打どころでもあるのか。俺の考で見ると

八重子様などゝは到底比物にならぬらしいが、お定お前何ういふ考だね。』

と、有繋は主人は主人だけの見識、夫の言にお定も前非を後悔して、

『なか〳〵腹の出來てる女らしいね。妾が見損つて居たのか知れません。兎に角早急に、探せるだけ探す事と致しませう。』

『其が可い。』

と、主人は點首いて居た。

頼四郎は垂頭いて更に物謂はず、健三は今となつてお今が一家の同情を一身に集め得たのを内心に滿足した。が、お今は果して探し出し得べきか？、斯は人々の心の底に潜む疑問であつた。

（四十六）

健三頼四郎は謂ふに及ばず、磯川の一家は其から其へと手を盡してお今の行方を探ねた。雖然更に其の手懸が無かつたので、健三は其の日其の日の事務さへ取得ぬほどに屈托して、時には物狂はしい絶望の聲さへ放つ事があつた。頼四郎はまた自身に其處此處と奔走して、而して其の結果を健三に復命した。健三の煩悶を見るにつけ、母親のお定は食事さへ碌々進まぬばかりに心配して、或は取詰めた出來心から、新聞で屢見らるゝ淵河へ身を投げたのではあるまいかといふ憂慮さへ起した。其の意を保ち兼ねては、折には健三に漏らすと、

「さ。」

と、謂ふばかりで、捗々しく返事さへせずに健三は情ない歎聲を漏すばかりであつた。其の間最も熱心に奔走したのは頼四郎で、最も平然として居たのは父親であつた。最も激しく煩悶したのは健三で、最も鬱いで居たのは母親のお定であつた。

斯の騒動の間に、何時か一週間餘りは經つて了つて、漸く熱くなり增る六月上旬の正午の頃、恁も出來事多き磯川の店頭に彳む一箇儼然とした紳士があつた。口鬚こそ無けれ、黒の山高帽子に糸魚子五つ紋の羽織、白つぽい縞の袷に、茶博多の帶、見たところ安植く踏んでも奏任以上の官吏かとも思はれた。年は三十五六でもあらうか。

ぎろりと店の隅から隅を見亘して、

『主人は在宅ですか。些と面談したい事があつて來たのぢやが、取次いで下さい。』

と、横柄な面構、如才の無い手代の一人、平蛛蜘なりに一禮して、

『主人は居りますが、誰方様で有在つしやいますか。』

『拙者か、む、、。』

と、點首いて、拋り出す名刺を見ると、

『春本勝之進。』

手代は小首を傾むけて、奥へ行つて、少時すると立戻つて、

『え――、伺ひましたところ、主人は不快で居りますから、何ぞ御用

を仰付け下さいますなら、鳥渡手前まで。』

『否。』

と、反身になつて、

『拙者は買物に來たのでは無い。また取引の爲にでも無いのぢや。』

『へい、左様致しますと。』

『主人に直々に會ひたいのぢや。』

『奈何な御用向でございますか、鳥渡其の邊を……、何分不快で居りますから。』

『貴様に謂つても解らん。何か、主人は會はれぬといふのか。』

『左様な譯でもございませんが。』

『會はれぬと謂ふのなら其までぢやが、併し其は却つて其方の不利益といふものでは無からうか。』

『へい、へい。では同然何か御用を仰付られますので。』

『解らん奴ぢやな。左様では無いと申して居るに、よろしい會はんならば會はんで宜しいか、お前御苦勞ぢやが、も一度取次いで呉れんか。』

其はもう、お取次は致しませうが、御用向の次第を鳥渡有仰つて下さいませんと、其の何んでございさす……。』

『用向の次第か。』

『左様にございます。』

『其はな。』

と、渠は落着き拂つて、

『斯うぢや、磯川一家の名譽に關する事ぢや。疾く謂へば暖簾に關はる事なんぢや。其に付いて一應主人の意を問に來たんぢやが、……畢竟拙者が老婆心……、親切なんぢやが其方で無にすると謂ふのなら、拙者は敢て強ひんよ。斯の家には今混雜が起きて居るぢやらう或者が居らんやうになつて。其なんぢや、其に付いて主人に會ひたいのぢや。』

『少時お待下さいまし。』

と、手代は慌忙奥へ行つて、再び出て來て、

『何卒お通り下さいまし。』

『然うか。』

と、紳士はづッと奥へ通つた。巧に姿を變へては居るが渠は櫻山が化けて居たのであつた。其に証據は左の頰に、それよ小豆大の黑丸子！

（四十七）

『私が主人です。』

『拙者は春本といふものぢやが。』

と、お互に初對面の挨拶が終ると、櫻山の春本は葉卷煙草に火を點けて、緩に一吸、ぱつと吹き出して、

『さて。』

と、勿体ぶつて切り出す。

『お邪魔を致したのは別儀でもないぢや、畢竟貴方ン許の一家に關した事なんぢや。むゝ。』

『何か左様な事ださうで。』

と、落着いては居るが、手代の耳打にてお今の事に關してならんと察した健三は、漫、胸頭の響動き出して、覺えず片唾が飲まれるのである。そも奈何なる消息を齎らしたのであらう、凶か？、吉か？、と、思つて凝如と春本の面を瞶つて居ると、渠は見返して、冷な笑を含んで、

『貴方、酷い事をしなすつたぢやね。』

『いや、別に……、酷い事といふのでも無いですが。』

『貴方嘘を吐きよつては可かん。今といふ女を欺したぢやないか。いや其の今といふ女は慥に貴方の何んぢやらうな？。』

『然うです、許嫁の女です。』

『よろしいッ！、慥に許嫁の女ぢやね。』

『然うです。』

『では貴方、其の女を冷遇したのも實際ぢやらうね。』

健三は、はつと赤面して、

『冷遇といふ譯でもなかつたですが、少々一家に事情が纏綿して居つ

たものですから、つい其の何んたつたのです。心にも無い事を謂つたものですから、其で……、何處へか姿を隱して了つたですが、何んですか、萬一貴方の許にでも。』

『いや、然うぢやないんぢやね。拙者の許には居らんよ。』

『貴方の許に居りませんと致すと。』

『酷い事になつて了つたね。』

と、冷に傍を向く。底意ありげに。

『えッ、酷いこと?。』

『左樣。』

『今が何んとか致しましたか。』

と、つッと體を乘り出す。忌はしい考に、と胸を衝かれて。健三は思はず面色を變へた。

『何んとしたかね、拙者は能く知らん。能くは知らんが、貴方。』

と、懷中を探つて、

『該品は覺があらう。』

と、一束の手紙を拋り出した。見ると、其は健三がお今に送つた幾通かの手紙であつた。

愈々不思議と健三は眉を顰めて、

『これは覺があるです。が貴方はこれを?……。』

『……拾つたのです。』

『お拾ひなすつた？。』

『左様。』

と、屹と健三の面を瞶めた。

『何處で？、何處でお拾ひなさいました。』

『さ、其は些と申憎いぢやがね。』

『然う有仰いますと。』

と、健三の手先は、わな〳〵顫出した。

『謂はん譯に可かんから謂ふがね、併し吃驚なさるな、向島ぢや。』

『え。む、向島と有仰いますか。』

『而も河の岸に落ちて居つたぢやね。側に尙だ風呂敷包が一つあつた

のぢやが、……つい、忘れて持つて來んかつたよ。』

『然う致しますと。』

と、急込む唇の色は疾や變つて居た。

『左様、多分投身をなすつたのかと、思はれるんぢや。其の時の形勢で察しると。』

『え、え、えッ。』

『お氣の毒の次第ぢやが、確に其に異ないんぢや！。拾つたのは一昨日の晩の、左様さ、十時頃でもあつたかね。』

健三は、仰天して殆ど正氣を失はんばかりの氣振であつたが有繋に氣を取復したのか、顫聲で、

『ではもう、確に投身をしたものと見えます、實は私の方でも手を盡して探して居つたですが、……いや御親切は忘れんです、實に何うもお禮の致しやうも。』

『何有禮には及ばんです。』

『何分後から、……斯の場合でございますから、お察し下さいまして

では斯の手紙は頂戴致して置きます。』

と、取上げんとするを、じろりと見て春本は頬膨らした。

『おい、おい。恍けなさんなよ。』

と、がらりと變はる鋭き五音。

『何んでございますと。』

『欲しければ三千圓お出しなさい。ね、其でも安値いものなんだが、大負に負けて三千圓なら手を拍ちませう。』

（四十八）

春木の櫻山は、ます〳〵毒舌を奮つて、

『お氣の毒と謂へば謂つたやうなものだが、其だつて爲樣がねえぢやねえか。自体お前さんが非いんだ。女一人を殺しといて、何處で風が吹くと言つたやうな面構は、些と蟲が好過ぎやしませんか。實は其は新聞屋へ持込まうと思つたんだが其では折角賣り出した磯川といふ名前に疵が付きはしまいかと思つて、賣りに來たのは私の親切

さ。慾と二つで何方も好かれと三千圓の無心に來ました、斯の構をして世間で評判の麥酒會社の社長さんのお名前は、三千兩ぢや安値いもんでさ。何うでがす？、お購なさいますか。」

健三は眼を鋭にして、對手の顏を穴の明くほど疑視めて居て、

『貴樣、强請に來たんだな。』

『强請？、……强請とは何んだ、人聞の惡い事を言つて與れるねえ。』

『强請で無くつて何んだ？、人の弱點へ附込んで……。』

『默れ、おいッ。お前さんは何んだ、いやさ磯川さんは人殺をなすつた。』

と、大聲になる。

『こらッ。』

と、一喝すると、

『な、何んだ。然うぢやねえか。お前さんは女を欺して、可いかね、嫌氣がさしたと謂つて、憫然に、女を酷目にしていや何樣に酷目にしたか知らねえが、何しろ死んで了つた位だから、其の酷らしさが思遣られらあ。ふん、餘り利いた風の事を謂ひなさんなよ。おい、若旦那何うなすつた。』

對手惡しと思つたのか、健三は默然として居た。

『これさ、何んとか返事をしなさらねえか。購はれねえなら購はれねえで可いが、事件は立派な新聞種だよ。小石に躓かねえやうに氣を

付けなさらねえと、折角のお名前に傷が付きますよ。三千圓は大きなやうだが、お前さんの薄情で因業なのを世間に御披露するなんざあ、へん。餘り氣の利いた仕事ではありますまいぜ。兎に角斯の手紙は私の金の蔓なんだから。』

と、手紙を懐に入れかゝるを、健三は慌てゝ押止めて、

『ま、お待なさい。』

『お購ひなさるのけえ。』

『然う……、まづ篤と談合した上でね。』

『何んだ、尚だ那樣煮切らねえ挨拶ですかい。』

『ま、靜になさい、緩とお話する事に致しませう。』

『然うですか、……などゝ油斷を喰はして、派出所へ訴へるの巡査の出張なぞはお利益ちやがあせんよ。私は强請るんぢやねえ、品物を賣りに來てるんだよ、何も無理に購つて與んなさらなくつても可いのさ。加之警察へ出た段になると、私の口から、べら〳〵と事の顚末を饒舌つて了へば、大騷！。死骸の搜索やら何やら彼やらで。ねえ大した事になつて了ひまさ。』

『いや、君はなか〳〵物知だ。』

と、健三も負けぬ氣の冷笑返して、

『お茶でも飲んなさい。今一應考へて見ます。』

『大層手間が取れますね、何しろ座り馴ねえ奴が、座つて居るんだか

ら耐らねえ、窮屈で遣り盡れねえ、御免なさいまし。』

と、どつかと胡座を組む。

『何うだね。千圓ばかりに負からんか。』

『千圓ね。』

『然うさ。』

『旦那、懸直は申しませんよ。』

と、憎々しげに空嘯く。

『負からんか。』

『勿論の事つてさ。往生際の惡い事を有仰いますな、ものは額が反古紙同然の手紙だが、磯川商店麥酒會社の名譽が賣物なんだ。』

『其は判つとる！、が、だから此方でも屢く事情も糺さないで、千圓進上しやうといふのだ。其の裏には何樣いかさまがあるか知れたもんぢやないが。』

『我程！、一應は道理だが、其はお斷り申しませう。』

『甚く強い事を謂つてるが、其を假令新聞屋へ持込んだところで、精々で十圓にはなりはしまい。』

『えッ。』

『千圓では買被りだが、折角の親切だから買つて置かうといふのだ。』

『だつて餘り安値いぢやがせんか。せめて最う五百圓出しなさい。』

『可厭だ。』

『可がす。』

と、ぽんと手を拍つて、

『根が資本なしだ、負ときませう。』

× × × × × × × ×

少時經つてから、櫻山は數多の手代小僧の探奇な眼に見送られながら磯川の店を立出た、懷中の紙幣を弄つて見ながら、

『いや、うけに入つて了つたな。斯うして千兩招納といて、國から籍を送らして、お今の女を女郎に賣飛ばして、また若干かにする。何しろ面が好いから、六七百兩は大丈夫。旨いな？。』

と、獨語いて頬の頽れんばかりの笑面であつた。

（四十九）

激烈なる驚愕と、譬ふべからざる悲痛とに神經を惱めるのでもあらうか、健三は櫻山に强請られた其の日よりして、どつかと病の床に着いて了つた。其の次の日の夕景の事であつたが、斯ばかり心配多き磯川の店頭に、また〳〵意外なる珍客が現はれた。其の人は車から下りると、縞の財布から幾箇の白銅かを取出して、汗を拭き居る車夫に手渡して、

『御苦勞でございました。』

と、田舎物の律義さは言は至つて叮嚀であつた。年は四十五か六でもあらうか、丈高からず低からず、身には結城紬の袷を着て黒繻子の細い帶を締めて、小さい丸髷の艶は尙しも褪せず、目鼻立きりゝと締つて色白く、身裝の野暮なのに比べて、人品は奈何にも立優つて見られた。』

婦人は店中を瞿々と瞶しながら、軈て手代の一人に對つて、慇懃に腰を屈めながら。

『此方はあのう、磯川樣と有仰いますので。私は田舎から參つたお今の母でございますが。』

『左樣で在有つしやいますか、へい、へい。』

と、手代は他の手代と何やら耳打して、軈て奥へ駈け込んでまた引返して、

『さ、何卒此方へ。』

と、愛想好く奥へ請じ入れた。

思かけ無い珍客に訪られて、奥では如何に斯の不幸なる客を謂慰めんと評議は區々、お今の踪跡を晦ましたるさへ、既に落度は充分なるに昨日の櫻山の口の端では何うやら投身したらん如き樣子もあるに、斯くては尙更大事と、各々密々に實否の詮議最中の矢先なれば、何んと申譯して可い事か、差當つての當惑に、常は横柄ぶつた奥方お定の方も額に皺、胸に患。氣を鎭めんとか白湯ばかり飲みつゝけて、辛而其

と思案の付いてか、まづ兎に角、出來るだけ叮嚀に待遇さではと奥まつた一室へ誘つて、接待の大役は罪はおのれ重ければとお定が引受けたは、有繋は男勝りの氣丈さよと、女中の蔭沙汰。

先づ道中の恙なかりしを悦ぶ挨拶など慇懃に慇懃を究めてお定の待遇ぶりの叮重さ。お絹は殊にお今の將來を托すべき家なればと、座にも堪へぬやうに恐入りて、只管にお今が到着以來蒙りたる親切の程を謝するに、有繋にお定は身に冷汗を流して、應對に窮すること幾度といふ事なく、充まれ長途の旅に疲勞れ玉ひしならん、爰は人馬忙しければ眠り難かるべし、此方へ來て打寛ぎて暫しは打臥玉へなど、枕取出して勸むるに、渾身綿の如くになつて、吐く呼吸さへ紅塵に汚れたれ

ど、斯くては禮を失はんと、辭退して、居住をさへ崩さぬお絹の擧動に、お定はいよ〳〵胸轟かすばかりであつた。

お絹は其と氣が付かず、

『早速でございますが、あの――、這度は娘が參りまして、定めし何かと御面倒でございましたらうに、行届きませんものでございますから萬事此方へお任せ申しますやうなにと、お今が申しますに任せて差上げましてございますが、私の方でございましても何んの貴方父さへ存生で居りますれば、這麼お耻しい事を致す譯では無かつたのでございますが、何分女許でございますので、つい、其の何んでございます。はい〳〵、娘は同然此方に居りますので。』

と、問はれて、お定は今更はつと答に窮つて、

『はい……。』

と、覺ず口を辷らして、

『いゝえ、あの……、何んでございます、只今は。』

『何方へか參つて居りますので。』

『はい、奈何にも此方には居ませんのさ。』

と、斷乎と謂放つて、お定は屹と胸を据ゑた。

（五　十）

『然う有仰いますと、何方に。』

と、お絹は氣遣はしげに訊ねた。

其の面を、瞥と見て、莞爾して、

『お今様はあの何んでございます。此方は御覽の通り手狹ではございますし、騷々しくつて王子の方へお遣り申して置きましたが、ふとすると今日あたり熱海の方へ娘と一緒に參つたか知れません。もし然う致しますと、何れ暫は逗留といふ事になりませうから、ちよいとお逢ひなさる譯には參りませんが、何んなら貴方が御出京なすつた事を申して遣はしても宜しうございます。御寛りで宜しうございませうから、まあ那して二十日餘り遣つてお置きなさいましな誠にお氣の毒様でございますが。』

と、お定は辯舌爽かに、眞しやかに欺いた。

と、いふのは、到着早々不吉な噂を耳に入れなば、荐ねて奈何なる珍事の湧上らんも知れずと、其の場だけの一寸脱、後日はまた其の時の思案として、追々に其と無く對手の感付かんやうにせんとの早速の氣轉は馴れたもの。

お絹は不審の眉を寄せて、と、小首を傾けながら、

『王子に參つて居りますでございますか。あの王子と申しますと。』

『娘の宅なのでございます。』

『其は何時頃からの事でございますので。』

『東京へお着になつて直にでございました。が其が何んとか、致し

ましたか。』

と、胸は惴々する。

『はい。』

『と、有仰いますと。』

と、早口に。

『何うも合點が參りません。』

と、物靜に。

『其はまた、何樣仔細なのでございます。』

『實は娘から手紙が參つて居ります。』

『え、え、えッ。』

と、お定は仰反らんばかりに仰天して、思はず顔色を變へたが、

『では此方の御様子は、……あの御存知で在有つしやいますので。』

『いゝえ、何うも存じは致しませんが、娘から參つた手紙には、彼女は當分下谷の櫻山様とか有仰います方に居りますさうで』

『えッ櫻山？。』

『はい、貴方様の御親類様で在有つしやるとかで、今度はまた御已介様な娘の親元になつて下さいますさうでございますが、今貴方の仰有いますお言では、何うやら話が……。』

『御道理でございます。其には些と込入つた話があるのでございますが、して其のお手紙は何時着きました。』

『四日ばかり前の事でございます。』

『お手紙の様子は……。』

『籍を送れとの文面ではございましたが何うも腑に落ちません箇所も見えましたので、其で私が出京致しましたのでございますが。櫻山様と申しますのは。』

『いゝえ、手前共の親類ではございません。』

『えッ、何んと有仰ります。』

『多分其の底には企謀のある事でございませうが、何はさて置いてまづ、其のお手紙を烏渡拝見致したいものでございます。』

と、手紙を受取つて、肚の中でづらり讀下して、

『此のお手紙の樣子では、何か健三との結婚上の都合で、櫻山といふものを假親にするから、至急籍を送つて與れとの事でございますが是は僞手紙でございます。第一此の手はお今樣の書風とは違つて居りますではございませんか。』

『やつ、其ではもしや。』

『お今樣は家には居られません。はい、行方知れずになつて居ります る。が、心配なさいますな、お今樣は慥に生きてお在有です、死にはなさいません。』

折から間の襖をさつと押啓いて現はれたのは、憂に窶れて蒼い面の健三であつた。

（五十一）

『伯母さんお壯者で。』

と、健三は往昔に變らぬ調子で輕く出て、

『久しく逢ひませんかつたね。』

お絹は娘の身の上の憂慮さへ打忘れて、疑如と健三に見恍れて居たが

『まあ健三樣でございましたか、私は誰方かと存じまして、眞箇に見違へて了つたのでございます。大層立派にお成んなさいましたこと』

『相變らず椀白ですよ。時に伯母さん、實に申譯の無い次第ですが、今度はまたとんだ事が出來上つて居るんで、實に何んですよ。お氣

の毒な譯です。が、心配なさる事はありません、遠からず行方が知れるでせう。何有其程の事……逃出す程の事も無かつたんですが、お今様が彼の氣象でせう。處へ家に些とばかり事情があつたものだから、婚禮が延々たなつて居た矢先に、少しばかり私と感情の衝突がありました。すると其の晩置手紙をして逃出して了つたんですよ此方の家だと其樣事も無かつたのでせうが、王子の姉の方へ遣つて置いたものだから、大騷動が起きて了つたやうな譯なんでね、併しもう家の方の相談も悉皆纏つて了つたし、お今の行方が分り次第結婚する運になつて居るのです。若し無事にさへ居て與れゝば、逃出したのが却つて幸だつたのですよ。といふのは……。』

と、彼はお今が無事らしき樣子のあるに悅しさ餘りて、大に元氣付いて咄嗟一家の事情を打明けんとするに、母は慌てゝ制へて、

『これ！、健三や、何んだねお前は。』

と、眼で知らすと、健三は微笑して、

『何有關はんよ。』

『關はないではありません。其の櫻山といふ奴と春本といふ奴と同じ奴らしいが、お前昨日の受取を持つてお在有なら鳥渡此の手紙と比べて御覽……、何うだね。』

健三は一束の手紙を千圓に購つた受取と、お今の手紙とを比べて見て

『いや大丈夫！、生きてる生きてる！。』

と、絶叫した。

『同じかえ。』

と、母が覗くと、

『同じとも！。畜生奴、一杯喰はされたな。』

『ほうら御覧なさい！。だから妾が然う謂つたのぢやないかね、篤と調べて見た上にお爲つてさ。詐欺だか何んだか正体も知れない奴に其様に急いで與る事は無かつたんだわね。』

『でも阿母さん、新聞に、と謂つたから私も驚いたのさ。先方の惡黨なのは初から見て取つたが、惡黨だけに眞箇に出された日には大事だと思つてね與れて遣つたのさ。萬一も出されて御覧磯川の財産は

半分無くなつて了ふよ。其に此の上も無い不名譽ぢやないか。何しろ可いやね、お今の行方さへ判れば五千や一萬の金は惜しくも無いぢやないか。』

『其は然うさね。』

『然うさ。』

と今度はお絹に向つて、

『何有ね伯母さん、昨日變な奴が私がお今に遣つた手紙の古いのを持つて來て、是は隅田川の川岸で拾つたが、當人は多分投身したんだらうつてね威嚇して、斯の手紙を買つて與れろといふ譯なんでね、私は八方へ人を出してお今の行方を探して居つたに、更に譯らんと

ころだつたから、或は然うかとも思つて、報知せたお禮に、些とばかりの金を與つたのです。今になつて見ると、馬鹿げた事なんだが』と、有繋に心の底に潜んだ汚ない考まで吐き出し兼ねて、と、先ろ其の場を濁して了つた。

『兎に角斯の下谷徒士町へ人を遣つて、樣子を探らして見やう、善は急げだ、早いが可い。』

と、健三は勇み立つに、

『其が可いね。』

と、母親も同意して、例の松藏と他に心利いた一名に委細を含めて、徒士町へと走らした。

尙健三は種々と一家の事情など打明けて、巧にお絹を慰むるに、お絹は胸の痞の一時に收まつた思のせられて、涙含んだ眼に謂知れぬ感謝の色が見られた。

主人の父親さへ軈ては座に加はつて、一家は稍賑はしくなる最中へ、徒士町へ走らした使の一人、悄々として立戻つて、

『大變でございます。其の家には最う貸家札が張つてありましたので近所で聞合はしますと、成程櫻山といふ者が住まつて居たに異ないが、昨夜夜脫同樣にして何處へか行つて了つたさうでございます。行先は固より知れませんが、何んでも十日ばかり前から、若い美い女の姿が見えたといふ事でございます。松藏殿は尙委しく樣子を探

つて來ると謂つて後に殘りましたが、手前だけ鳥渡お知らせ申しに歸つて參りました。』

人々は二度吃驚。中にもお絹はわつと泣き俯して了つた。家内は再火の消えたらんやうに寂然した。

（五十二）

農商務省の大厦の中から、今しも出て來る二人の男がある。一人は丈高く痩せた方で、重目羽二重の一重羽織にネルの一重茶苧の袴を着けて、稍汚れたパナマの帽子を眉深に冠つて小脇に荒目皮のポートフォリヲを擁へた淺黑の三十許の男であつた、今一人は背は稍低い方で、

豐腹と肥つて、薄地霜降の格子羅紗の上着、黑地白地の縞羅紗の窄袴の洋服出立、帽子は麥藁のひねつたものを戴いて、露西亞皮の編上げは眞白に砂に塗れて居た。金緣の眼鏡の下に其の大きな眼に凄ざに過ぎるはかりに光つて居るが、色白で下膨した口元に愛嬌ある面立であつた。

對話に勝手惡しとか、丈低き方は洋傘を小脇に挾んで、押並びながら夕日さす路を急ぎ行く。

『何うしたね、其で先方の令孃は好意を表して居るのかね。』

と、丈の高い方が低いのを瞰下した。

『其がね何うも僕にも判らんのさ、國代樣の謂つてるには何しろ一應

妻君とも相談して見ると謂つて居たがね、今に何んと返事の無い處を見ると、何うも御縁が無いらしいから心細いぢやないか、何んとか、君の辯舌で以て一つ周旋してくれ玉へな。行かんかね、先は何しろ非常に氣位に高い令嬢だといふ事なんだから。』

『否、ね、今時の氣位の高いのは、あてになつたものぢやないが、む、、其は周旋して見無いとも限らんさ。併し淡島君、八重子さんにばかり無中になつて居ないで、僕の方の話にも傾き玉へ。』

『君の方の話といふと。』

『例の嬢さん下女の事さ。』

『嬢様下女は可かつたね、其は何、物に依つては傾かん事も無いけれ

ど、何しろ下女ではね、降服るさ。』

と、眼鏡を氣にして手で制へる。

『下女と謂つちや惡いけれど、實は所故づきの女で、以前は身分のある女ださうだ。』

『以前は何うでも、現在下女では爲様がないぢやないか。』

『甚く現金だね。所謂時代の精神なるものか。』

『冷評すのは廢して與れ！、然ういふ譯でも無いのさ。』

『ではまあ、鳥渡あたつて見玉へな。能くは聞かぬかつたがね、何んならば詳しく調べてお聞に達するといふ事にするが斯の五月頃に東京へ出て、其から其の短時間の間に種々な辛酸を嘗めて、己むを得ず

奉公に住込んで居るんださうだが、實際だよ、美人だね。然うさ年は二十位かね、背は高からず低からず、中肉中背で、色白で眼がぱつちりして居て、鼻筋が通つて、口元が引締つて、些とも下女らしい風もないね。其處が嬢さん下女の名のある所以なんだが。』

『成程成程！、其の上氣窮が優しくつて躾が好けりや申分なしさ。處が性質が見あげた程優れてゐるから不思議な位さ。何れ薄命な身の上に違ないが君に一片の同情があつたらば、娶つて與り玉へ。我輩悅んで親元とならう。』

『甚く肩を入れてる。ね。』

と、淡島は冷に、

『内々君が何んぢやないか。お古を持餘して……。』

『怪しからん！、馬鹿を謂玉へ！。』

『否、是は笑談さ。まづ笑談は拔として、眞箇に國代の方の盡力を願ひたいがね。』

『執念深い男だね。國代はまあの國代さ。這麼堀出物を放擲とく方はない。』

『併し其は處女ではあるまい。其の秘密にして居る仔細といふのを聞かないうちは、甚麼失敗を演ずるかも知れないからね。名は。』

『お今といふのさ。實際のところ田舍育で、八重子樣のやうに澁皮の除れた處が無い代に氣立は至つて優しい。最初の望は夫婦暮の隱居

の世話でもするか、何んでも堅氣の家といふので、三年許勤めて見たいといふ譯だつたのさ少し奇しいのは戸外に出るのを非常に嫌つて居るけど、是とても却つて性質が内氣つ証據で、兎角臺所に座つて仕事を弄つて居る方が勝手らしい。』

とり合ふうち何時か通へ出たので、

『僕は鐵道馬車さ。ぢや失敬するよ、何れ其の間に來て見玉へな。屹度君が恍々して了ふから。』

『では土曜の晩あたりに本尊拜禮と出掛けやう。』

と、淡島は輕快な笑を殘して、とある横町へ曲つて了つた。

（五十三）

淡島の同僚である黒田の家では、今しも妻君が浴湯を了つて修飾はてた身に形付の意氣がつた浴衣を着て、椽側に立出で初夏の庭の面を興ある事のやうに眺めて居た。如露を持つて庭の盆栽などに水をうつて居るのは、お今の身のはてゞあつた。

『お前もう可いよ。御苦勞だつたね、そして此處へ腰をかけてちつとお休みな。旦那樣は今日は宴會があると有仰つたなら、晩方になつたつて、那麼に急しくもあるまいから。』

『はい、有難うございます。』

『それから何んならお湯に入つても可いよ。』

『いゝえ、お後で戴く事に致しませう。』

『然うかえ。お前眞箇に氣立が優しくつて、妾は眞箇に安心して居ますの。だけどお前、あの何んだつてね、奉公なんかする身分ぢやないんだつてね。まあ什麼譯があつて零落になつてお在有なんか知らないけれども、塲向に依つてはお前の力になつて、行末の身の爲になるやうにして擧げたいつてね、旦那樣と何時も然う謂つて居ますの。』

『いゝえ、もう、何時も種々と有仰つて下さいまして、誠にお禮の申し樣もございません。何うせ奉公に參つたのでございますから、其

の邊の事は御心配下さいませんで、同然普通の奉公人のように、御遠慮なしに何んでも然う有仰つて下さいまし。然う致しませんと、却つて痛入りまして居難うございますから。』

『何有ね、別に妾等が力になつて何うするといふ譯にも行かないだらうから、公然に世話なんてえ事は到底出來まいけれど、それでもまた甚麼事があつて、人の力を假りないと定つたものぢやないやね。ね、お前、然うぢやないか。』

『然うでございますとも、其はもう貴女……妾のやうな不束者を種々と御親切に有仰つて下さいまして。』

『お廢しよ、那麼事は！、それはね。女といふものは、自分一人の力

で何うするといふ譯にも行かないものだから、場合に傍つては什麼富い家に生れをつて隨分奉公をしまいものでもありません。些とも耻かしい事はありやしない。恁う謂つては何んだが、お前なんぞは自分の我儘で那樣體にお成りでもないのだらうかうそれは謂ふに謂はれない辛い目にお逢ひだらうさ。阿母さんが繼母で家に風波が絶えないので、其で家出をお爲だとか何んとかね。そりや種々な譯もありませうさ。有勝の事だわ。」

お今は伏目になつて、疾や涙にくれながら、

「左樣でございます。」

「其代りまた女は廢りはないものだから、氣立さへ好けりや隨分出世

も出來やうといふものだから、何も棄身になるには當らないやね。」と、意味ありげにお今の心を素引するやうな氣勢であつた。

急に小聲になつて、莞爾しながら、

「お前淡島樣といふ方を知つてお在有か。」

「はい。」

「氣輕で面白い方ぢやないか。」

「左樣でございますかね。」

「左樣でございますかつて、おほゝ。お前知つてお在有の筈ぢやないか。」

「其はお顏だけは……。」

『お顔だけはかえ？……、まあ！、お悶然に。』

『お悶然とは、誰方がでございます。』

『お今はまあ、おほゝ、お前まあ、空々しい事を云つてさ。』

お今は耐力も無く畏入つて、さつと面を赧めながら、

『とんでも無い事を有仰いますで。』

『誰が愚弄るものかね。お前那様事を云つて居ては、眞箇に罪だよ。』

（五十四）

淡島は一度は國代の八重子嬢に滿身の血を湧かしての執心ではあつたが、屢々八重子の冷かなる姿態に逢つては、有繋に心を取變へて、全く望を絶てると同時に、同僚黒田の家に出入する事の繁くなつたといふのは、お今を一目見てより、奈何にしても棄難き念に引かされての事であつた。

其の頃よりして黒田家夫婦が、お今に對する仕打は一變して恰も妻君俊子の妹の如く取扱はれるやうになつた。

お今は愈厄難の身に落來れるやうな心地のせられて、安き念も無かつたが、今、夫と無く淡島の事をほのめかされて、漫胸頭の騒ぐのであつた。

『實は前から、お前に聞かう聞かうと思つて樣子を見て居たんだが、

奉公に出たのは家が居づらいからで、別に定つた縁があるので無いとお云ひだから、聞いて見るんだが、お前もしか、好い方でお前を貰ひたいといふ方でもあつたら縁につく氣は無いのかえ。』

『はい、其は誠に結構でございますけど……。』

餘り結構な方でも無いけども、其でも將來望のある方だから惡くは無いだらうと思つてね、其も妾等の方から申込んだのでは無くつて！、先方でお前を見込んで、是非！、てえまあ、事なんたから、お前行つて見る氣は無いの、餘り立入つた話で、實は何うかと思つたがね、先方で餘り乘氣なんだから、お前に鳥渡聞いて見たの。そりやもう、あのなら方決して不足は無いだらうと思ふが、何うだね

妾等に世話をさせる氣は無いの。』

『それは實に結構でございますけど、斯の上に那麼お世話までして戴きましては……。』

『濟まないとお云ひなのかえ。濟まないも何も要らないけどお前さへ承知してお與れだと、口を利いた効もあるといふものだから……先方の方といふのが、それちよく〳〵お出なさる淡島さんなの。御覽の通り誠に毒氣の無い好い方でもあるし、お役所では却々評判が好くつて在有しやるからお前も幸といふものだね。……それにお一人限で在有しやるのだからお誂向だわ。お前は阿母さんが一人お有りだと云ふから、其の事もお話して見たらね、それは老母一人位の事

なら、却つて家の締もつく事だから、引取る分には差支が無いと有仰るし、這麼恰好の縁談といふものはある難うございまもんぢやないよ。』

『はい、有難うございますけど、それでは餘り恐入つて、御返事の申上げやうもございません。……御覽の通り逗麼不束な田舍ものでございますから、何うもお受け申す譯には參りませんのでございます』

『だから先方で是非與れろと有仰るのぢやないか。お前に都合がある のなら兎も角、然もなけりや行つてあげては何うだえ、功德にもなる事だから。』

『あら！、奥様のお人の惡い。』

と、お今は思ひえず微笑んだが、忽ちまた憂の雲一重眉目の邊に現はれた。

奥様は可笑しく眞面目に、

『あれ笑事ぢやないよ。眞箇だよ、淡島さんは何のくらゐお前を好いて在有しやるか知れやしないの。それがお前破談にでもなつて御覽彼の方は什麼にお力落になるか知れやしないわ、何うだ？、行つてあげては。』

『でもございませうけど、釣合はぬは何んだとか申しますから、幾、御親切に有仰つて下さいましても、餘り鐵面しいやうでございますから……。』

「然うお前、自分でばかり卑下して居ては爲樣がないわ。折角お前先方では彼のくらゐに有仰るものを、然う一酷にはねつけて了ふのも何んぢやないか、女冥利が盡きるといふものぢやないか」

と、手嚴しく責付けられて、心弱いお今は今更何んと辭まん術も知らず、たゞ悸々逡巡するばかりであつた。

（五十五）

詰らるゝが苦しさに、出來得るたけ秘め置かんと臍の緒を固め居たりし秘密をも、お今は悉く俊子の前に打ち明けて了つたゝ

お今は磯川家の紛紜に一時は心惑ひて、女心の深くも行末の事など考

ふる遑もあらず、一夜王子の三橋の家を脱け出して廣小路の辻に徘徊ひし折しも、圖らず若やと疑ひし疑の事實となりて眼前に現はれしに心奇しくも狂ひて生れて此來始めて嫉妬といふものゝ味をしたゝかに嘗めさせられた。餘りの事と口惜しくもあり腹立しくもあり、また嫉しくもあり、悲しくもあり、思窮めては前後不覺、炎上る瞋恚のほむらに煽られて、一度は引返して室町の本宅へと荒込まんとまで狂立ちしものゝ、固より心弱き性質の、踏切つて其の實行は思も寄らず、はては失心したらんやうに、何處と的處もなく歩く間、ふと邂逅したは櫻山といふ魔性の怪物、此奴始めは甘き油を沃けし口車に乗せて、空々しい親切ごかし、うかと乗つたがお今の世馴れぬばの事であつたが

さて誘はるゝまゝに其の宅へ伴はれて、三日四日と過す間に、合點の行かぬ節のみ多く眼に付くばかりか、出入する者の人相の氣味惡さ。折には主人の櫻山嫌味な眞似して戯むるゝさへ居堪らぬに、或夜の寢覺にふと耳に入りしは、櫻山が誰やらと我身の上に付きての密々話。怪しと心付きて或は母樣の仰有られし魔の者とやらで無いかと、思ふ矢先なれば怖々耳を聳つれば、何うやら話は我が身を濁水の中へ抛り込んで金にせんとの企謀の底らしい話の模樣であつた。さてこそ！、いよ／＼其よと飛起きんとは思ひしなれど、いや／＼今騷立つては毛を吹いて疵の譬、反つて身の爲ならずと狸寢入して恐ろしさを忍んだ切なさといふものは。

斯くて其の次の日、櫻山が何處へか立去りし隙を覗つて、辛うじて蛇の口を脱れて吻と一息。其からまた身の落着を種々考へし揚句、今となつて國へは歸れず、然ればとて王子の三橋へは尙のこと、其の夜は旅籠屋に終夜寢ずに明して、翌くれば早朝口入宿を探ねて、其家にも二夜ばかり明して、法外の飯料と身元引受賃を貪られて、漸々と初奉公の目見得せしは卽黑田の家であつたが、後で氣が付いて荷物を調べると、何處にて拔かれしものか、健三より我に送つた手紙といふ手紙は悉く紛失してあつた。訝かしと一時は氣に懸けては居たものゝ、其の間に忘れて了つて、お今は何處でか取落したものと思つて居たのであつた。

始終を聞いて了つて、俊子は幾度か怪訝な眼を聳てゝ、かくては未だ其の磯川とやらんいへる方とは手の切れたるにもあらねば、一時は紛紜のありしにもせよ何時奈何なる風の吹廻つて、軈て芽出度き終結を見んも知れぬものを、更にお今が身上に立入つて、縁談を強ひんも心なき業なれど、

「まあ那様所放があるのかえ。些とも知らなかつたものだから、お前の身の爲にと思つて勤めたんだから、惡く思つてお與れないで。では其の様子を旦那様にもお話して、淡島さんの方は斷りませう。」

「何うか然う願ひます。」

と、應へてさし垂頭く心の底には、あはれ優しい心の籠つて居た。今

頃は磯川の家では奈何なる騒の惹起つて居るであらう。賴四郎にも謀つて兎も角一度國へ歸つてこそ穩な仕方であつたらうに、つらあてがましき世に耻しき大膽なる仕打に衆を惱ましたる事の魯鈍しさよ。と漫悔悟の念に呵責まれて、猶未練は健三に殘つて、或は斯の結婚の成就する事もあらんかと果敢なき空賴して居るのであつた。あはれ失望して冷返つたお今が胸は今も一道の光に幽に照らされて居るのであつた。

（五十六）

其の次の日黒田は、築地の高等下宿なる淡島の室を訪づれてお今の答

を傳へやうとした。折から淡島は晩餐中で、一酌を傾けて後陶然として微醉の狀であつた。黒田が入つて來る委を見て、

『やあ、恰度好いところ。』

遽かに手を打鳴らして、酒を命じなどすれば、黒田は苦笑して、

『いや、餘り御馳走される方で來たんでは無いよ。放擲つといて與れ玉へ。』

『まあ可いぢやないか。其とも何か面白からん事でもあるのかね。月下氷人たから、放擲つとけないぢやないか。』

『否餘り月下氷人なぞと言ひて貰ひますまい。』

『何故かね。』

『何故と云つて。』

と、氣の毒げに淡島の面を見ると、淡島はまた氣懸でならぬらしく、

『何うしたんかね。』

と、眞率になつて居る。

『はゝ、然う出られては閉口する。』

『いや何んだか變だね。』

『眞箇變なのさ。』

『いよ〳〵以つて、容易ならん形勢だね。』

『其の通りさ。』

『いや何んだか心掛りなことになつて來たやうだぜ。吉報を齎らして

來て與れた譯ぢやないのかね。併しまあ一つ……可いぢやないか飲り玉へな。吉にしろ凶にしろ少時でも蓋を開けないうちが樂さ。』

『ところが吉ならば思はせぶりも面白いが、……實にお氣の毒な譯さね。』

『吉報じやないのかね。いよ〳〵ね。』

『まあ然うさ。吉報どころか吾輩大に君に謝せんければならんのさ。眞箇面目を失して了つたよ。君に會はす面もない次第だけれど其の邊は偏に我が輩の苦心に面じて勘辨して與れ玉へ。』

『勘辨しろの、會はする面が無いの、と、變に改まつて、一体まあ何うしたのだね。譯を云ひ玉へ、譯をね。』

云ふがね、まづ一杯飲んで。』

と、黑田はぐつと一口に猪口を飲干して、

『何んだか何うも云難くつてね。』

『何が云難い事があるもんか。君と僕との間に城壁を設ける要はないよ。』

『ぢやあ云ふが、例のね……、お今の緣談は不調和になつたよ。』

『えゝ、何うして、彼は君が當初僕に勸めた癖に。』

『其だから實に云憎いのさ。』

だつて今更其樣事を云つては爲樣がないぢやないか。お今に遺傳病でもあるといふのかね。』

『然うぢやないよ。』

『然うでなければ……、はてね其ぢや情夫でもあるのか。』

『其様淫行な女ぢやないがね。』

『では何か、僕が御意に召さんと云ふのか。其で君が那様に云難いのだらう。何んの事だ馬鹿々々しい。』

『否、那様に癖んだものでは無いよ。』

『それはね、何うせ僕なんざ、何處へ行つても好かれない方さ、だから君に一臂の力を假りたのさ。』

『其がね、お氣の毒さ。假られ効も無くつて。難しい事を云つて慍つて了つては困るがね、彼女は嫁入の出來ない譯があるさうだよ。』

『それはね、辭わるには何んとも云へるさ。』

『實際彼女には既に夫が決つて居るんださうだ。』

『夫！……、夫持をまた、君は何んだつて僕に勸めたんだ。怪しからんね。』

『其がね、僕些とも知らんかつたのだよ。昨日初めて君との緣談を持出して判つた譯なのさ。だから那様駄々を捏ねずと、一通仔細を聞き玉へ、隨分憫然な身の上なんだから。』

『是は近頃迷惑だね。』

『迷惑だつて、君も一度熱くなつた女ぢやないか、一滴の涙位は當然のお禮だ。』

「馬鹿な事をッ！、……併し夫の名前は何んといふね。」

「確か磯川とか云つたつけ。」

「えッ、磯川！。」

「君心當りがあるのか。」

「むゝ。何有鳥渡。して夫ある身が何うして奉公なんぞに出たのだ。確か磯川と云へば麥酒會社の持主な筈だ。」

「然うさ。」

「可笑しいね、何んだつて奉公に出たのかね。」

「其處さ。其處に悶れな話があるのだ。君も實際彼女を愛しとるのなら、大に奮つて彼女を元の身分に立歸るやうに盡力するが可いね。」

黑田は此に至つてお今が身の上を語つたのであつた。

（五十七）

磯川の家では公になし兼ねたお今が踪跡を探らんとて、或は探明局に托し、手代の下々に至るまで心を碎いて、手がゝりを求めしかど、曾て行衞は知れなかつたのである。お今の母親のお絹は、若や娘の淵河にでも身を投げしにやあらん、或は惡漢の術に乘つて、淺猿しい境に身を落とせしとせにしやあらんと、夜もをちゝ眠らぬ心配に、磯川の一族はいよ〳〵心安からず、種々と不幸の老母を慰めつ賺しつすれど、更に其の効も見えなかつた。此の事何時しか國代の耳にも入つて

八重子は始めて健三が此の頃の姿態の因を悟ッて、さては己の戀をも忘れて、諸共にお今が心根の哀れと、其の不幸を慘んでは、あはれ一掬の涙を惜しまなかつた。お今が爲には皆賀すべき出來事のみではあつたが、お今の行衛の杳として知れぬに、衆々倦みはてゝ、遂には其の死生をさえ疑ひ、占、祈禱などに覺束ない助力を乞ふやうになつた

× × × × × × × × ×

今しも國代の主人は、奥まつた一室に、來客の淡島と何事か打語ひつゝある最中であつた。國代は髯も較胡麻塩になつた老人で、飽まで威嚴の備はッた容貌であッた。淡島は弗と想出したやうに、

「いや、面白い……、と謂ッては何んですけれど、妙なお話があるですよ。眞僞は判らんですか。」

「は、はあ。」

と、髯を弄りながら、

「甚麼事かね、また誰かゝ御用商と結托して、コンミッションにでもありついた事なんかね。」

「何う致して。話が餘程小説的出來事なのですよ。」

「其が面白いぢやね。聞きませう。」

「は、確か貴下のお近親かと思ふですが、……あの商標か何んかの事で、私にお話があつた磯川とかいふ方がありますな。」

「むゝ。あるよ。」

「其の方なのです。」

「は。其が何うしました。」

「外でも無いですが、其の磯川さんに近頃何んか問着がありは致しませんか。」

「其を何うして御存知ですな。實は其の家出をしたものがあるぢやね其で紛紜して居るぢやよ。」

「其は確かお今さんと謂ひませうが。」

「はてね、能く御存知ですな、では貴下もしか、お今といふ婦人の居所を知つてお在有では無いかね。」

淡島は言を儉約にしてお今の身の上を話しながら、

『誠に氣立の優しい見あげた婦人であるですが、何うして那樣紛紜を惹起したものですか。其ともお今さんに何か瑕瑾でもあるのですか何うか丸く治まると可うございますがね。』

『それは眞箇ですか。いや實際の話なんぢやね。實際とすると、早速ですが黑田に相談して、一つ話を纏めたいぢやがね。』

と、其より萬事打合せなどあつて、此日は珍らしくも八重子は折々座敷に侍りて、茶菓を侑めなどして居たが、軈て時分時なればと謂つて夕餉を饗し、酒を侑めた。

「今日は八重がお酌を致しますさうですから、是非お過しなすつて下

さいまし、それからつかんお話でございますが、向刻のお話のお今さんと有仰る方は甚麽方でございます。」

「まあ、其は田舎くさい點も見えるやうですけれど、縹致は申分は無いですね。其に性質が至つて内氣で……、何様風だと仰有るんですか、左様さ、中肉中背といふのでございませうな、色の白い、眼の清しい、下膨の面立ですな。

「は。然うでございますか。では同然彼の方が然うなんだよねえ、お八重。」

「然うでせうよ、何んだか御様子が大層變でございましたもの。」

と、八重子は何氣無い体で謂つた。淡島は、

「何んですか、其のお今さんいふのを御存知なので。」

其の時主人は口を入れて、

「松源で逢つたといふのかの。」

「はい。其から廣小……。」

と、謂かゝつて、八重子はふつと口を噤んで了つた。

「其から何うした。」

と、父は意氣惡さうに訊ねた。

「何處かで彼の方らしい方を見掛けましたよ。何處でございましたか」

と考へる眞似をして、其に紛らして了つた。父は快げに、

「何にしても行先が知れて是程目出度い事は無い。磯川の滿足が思遣

られるよ。……誰か使を遣つて疾く知らして與らう。手紙！……いやまだるい。電報！……いや面倒だ。其れ！車夫を呼べ。」

（五十八）

「お今やお今や。」

と、呼ふ聲のするに、何事であちうかと、お今は珍客ある座敷の閾居際に手を支へて、

「何んぞ御用でございますか。」

と、優かに伺へば、一座の視線は一齊に此方に集まれるが中に烱々たる國代老人の眼は殊に氣味惡く思はれた。

俊子は微笑みながら、

「づッと此方へお出なさい、遠慮するには及ばないよ、其處では遠くてお話が爲難いから。」

と、謂つて、さて國代老人に向つて、

「あのう是がお今さんと有仰るのでございますよ。其から今から辭を改めますがね、お今さん是が國代さんと有仰るの能つくね、お禮を申上げなすつたが可うございます、今度是非貴女を磯川樣の方へ引戻すやうにつてね、御盡力なすつた方なのですから。そして最う、お支度をなすつたが可うございます。いよ〳〵話が纏つたさうでございますから、

『妾の方には關はずお歸りなすつたが可うございます。何しろお芽出度い事でございましたのね。』

お今は唯茫然として、人々の面を瞶めて居たが、軈て耻しげに愁然と垂頭いて了つた。

國代老人は例の快活な大聲で、

『はあ、始めてお目に懸るんぢやが、お今さんといふのは貴女の事かね、私は國代といふもんぢやが、以後は別懇にして貰はんければならんぢやよ、むゝ。』

『はい、もつお禮の申し上げやうもございません。』

『何有、厄介はお互にされもし、爲もするもんぢやゝ、併し今回は實に

飛んだ事ぢやつたね、定めし辛い目にもお逢ひぢやつたらう。が磯川の方は最う、甚麼事があらうと、本人を搜出して改めて立派に結婚させるやうにと一家の相談が決つて、全て準備も調つたる次第ぢやから、此の處は素直に歸んなさつた方が可いかと思ふんぢやが。加之國の方からは阿母さんが上京して居るさうぢやから、是程好都合は無いぢや。此の家へは改めて磯川の方から挨拶があらうから、心配せんでね、さ、早速支度に懸んなさい。』

豫て噂に聞いた國代老人が花も實もある親切の淡島より、話には斯の老人が大なる盡力に依つて、自分は再び健三に面の會はされるばかりか、結婚さへ故障も無く出來るやうになつたとの事である。而して妬

ましく思つて居た八重子は、老人の受兒なる事さへ知つたのである。

軈ては老人より磯川に通じて、老人自身に迎に來べしとは、俊子と共に兼て期して居た事であるから、お今は厚く禮を謂つて、座を退つて髪を取繕つて、着物を着換へて、再び立出でると、間も無く國代老人と共に黑田の家を辭して、門に待たせてあつた車に乘るが早いか、二臺の車は室町さして勢好く駈け出した。

お今は恰も夢を見て居るやうな心地であつた。

× × × × × × × ×

其から幾程も經たぬ間に、健三とお今は結婚の式を擧げた、其の日は

黑田も淡島も招かれて座に連なつたが、以來黑田と磯川とは最も親密な間となつた。八重子は一度淡島を嫌つたが、心機一轉父の勸に從つて、學士に嫁がんと思ひなしたのは、お今が家出の噂の父の口から自分の耳に入つた。頃の事であつた。でこは健三がお禮にと謂つて、其の間に周旋してお今との結婚の後間も無く、合衾の式を行つた。賴四郎は一家の風波の既に收まつたと見て、豫て期圖した海外殖拓の事業に手を着けんと、程なく横濱出帆の汽船に搭じてニユーギニヤに趣いた。此の日賴四郎を見送らんと横濱埠頭に立つた人々の中で、最も痛切なる涙を以て離別の手巾を振つたのは、お今であつた。執拗で意地惡で而して高慢で酷薄であつたお定とお國とは、結婚後は復健三お今が